

教育力

『若者の流出』

を止める

Report.4

連続シンポジウム

「少子化の流れに抗して」

2016年3月12日[土]13:00～

こうち男女共同参画センター「ソーレ」

主催 公益社団法人 高知県自治研究センター

講師

岩本

悠氏

島根県教育魅力化特命官



目 次

1. 開会挨拶	2
高知県自治研究センター代表理事 筒井 早智子	
2. 基調講演	4
若者の流出を止める「教育力」	
講師 岩本 悠 氏（島根県教育魅力化特命官）	
3. パネルディスカッション	29
パネラー	
岩本 悠 氏	
高石 清賢 氏（嶺北高校振興会会長）	
岡村 凌兵 氏（嶺北高校3年生）	
敷地 那奈美 氏（窪川高校1年生）	
コーディネーター	
畦地 和也 氏（黒潮町教育次長・高知県自治研究センター理事）	
4. 閉会挨拶	

連続シンポジウム「少子化の流れに抗して」

第4回 若者の流出を止める「教育力」



司会 石川 俊二

皆さん、こんにちは。ただいまから第4回の連続シンポジウム、今回は『若者の流出を止める「教育力」』というテーマで第4回目のシンポジウムを始めたいと思います。

私、本日の全体の流れを担当させていただきます、主催者である高知県自治研究センターの石川と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

この連続シンポジウムも今回で第4回目となりました。基調講演のテーマは「少子化の流れに抗して」ということでありまして、人口が増える減るということだけに一喜一憂するのはどうかなという思いもあるんですが、それはそれといたしまして、これまでこの連続シンポジウムの中では、どちらかというに移住ということに焦点を当ててやってまいりました。

その一方で、出ていく人たちを止める、そういった方向で流れの今回焦点を当てる。その中でこの「教育力」ということに焦点を当てて、きょう大変お忙しい中を島根県の教育魅力化特命官である岩本悠さんにお越しをいただきまして、基調講演をしていただくことになっております。

ということで、早速始めてまいりたいと思いますが、開会に当たりまして、主催者であります高知県自治研究センター理事長の筒井早智子よりごあいさつを申し上げます。



高知県自治研究センター代表理事 筒井 早智子

皆さん、こんにちは。本日は、この週末のこの時間にたくさんお集まりいただきまして、ありがとうございます。

先ほど司会からも申し上げましたように、今回が連続シンポジウムの第4回目に当たります。私どものセンターでは、市町村消滅の最大の原因は、高齢化ではなく少子化であるという考えのもとに、高知県や市町村が重点施策として推進しております少子化対策にスポットを当てまして、連続シンポジウムという形になりますように、「少子化の流れに抗して」ということで企画いたしております。

面いたしております。

少子化対策は、若年人口の流出に歯止めをかけ、移住者の受け入れなどを促進することで流入増を図るとともに、地域が一体となりまして、結婚・出産・子育て支援などによって、結婚したい、子どもを持ちたい

という希望がかなう社会を実現することが求められております。

昨年2月に開催しました第1回のシンポジウムでは、「増田レポート」の検証と逆の流れであります「田園回帰」の全国的な状況、また第2回のシンポジウムでは、移住促進の先進地であります中国地方、その中でも高齢化率や人口規模、中山間地域を多く抱えている状況など、高知県と非常に共通するところの多い島根県から、その状況や支援の体制、手法などを学びました。そして、第3回目は、都市部から地方へと移動・移住している若者が増加しているという現象の背景にあります社会経済構造の変化と、経済的な豊かさよりも別の価値を見出して地方に向かおうとする若者の価値観の転換などについて学んでまいりました。

今回は、先ほど司会のほうから申し上げましたように、島根県の海士町の島前高校で生徒数が非常に減りまして、10年ほど前なんですけれども、存続が危ぶまれたことをきっかけに学校教育を魅力化するという取り組みをされまして、生徒に地域の良さを学ばせるといようなこと、そして地域外への若者の流出を減少させたというそういった実践、そして高知県内における取り組みについて学ぶことといたしております。

第1部は、遠路お越しいただきました島根県教育魅力化特命官、岩本悠様に記念講演をお願いしております。

また、第2部は、岩本特命官にもご参加いただきまして、パネルディスカッションを予定しております。地元からは嶺北高校振興会の会長さん、それから嶺北高校と窪川高校の生徒さんにも出演していただくことになっております。

こういったシンポジウムやセミナーは、今後とも私どもで継続していろいろ事業として予定を立てております。その折にもぜひたくさんご参加いただきますように、よろしく願いいたします。

非常に今日はこれから4時40分までの長丁場になりますが、最後までどうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

(司会)

それでは、基調講演のほうに移ってまいりたいと思います。

先ほどからお名前を申し上げておりますが、改めて岩本悠さんの簡単な略歴をご紹介します。

岩本悠さんは、東京都のお生まれでして、ソニーの人事部にいらっしゃるときに、島根県の海士町島前高校に出前授業に行かれて、それで海士町に移住をされて、2006年から地域との協働で高校の魅力化に従事をされ、廃校の危機にあった島前高校の生徒数、クラスまで増やしてしまったという実践をされてきた方でいらっしゃいます。今年度、2015年度の昨年の4月からは、島根県の教育魅力化に携わる教育魅力化特命官として、現在、島根県庁でご活躍をされていらっしゃいます。

それでは、岩本さん、よろしく願いいたします。

2 基調講演

若者の流出を止める「教育力」

島根県教育魅力化特命官 岩本 悠 氏



ただいまご紹介にあずかりました岩本悠です。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

今日いただいたお題は、この「教育力」というのをキーワードにいただきまして、この「教育力」って一体何なんだろうか。なかなか僕自身も耳慣れない言葉で、僕なりに考えてみました。「教育力」というのは、一つは、学習力を高める行為というか、テンポアップしながらやるものですが、意図しながら働きかけるものですが、その結果、一人一人がほんとの意味で学習力を高める。そういったものでもあるのかなと思っています。この場がぜひ非常に高い学習力における学び合いの場に、今日一日なったらいいかなと思っています。

その中で、学びにおいて非常に重要な要素は、問題意識や目的意識を持って、意図を持ってこの場にいるということと思っています。それは、学校の学びにおいても大人の学びにおいても共通すると考えてます。最初はここから入っていきたくらいかなと思っています。

私の今日の意図、「何のために、私は今日ここにいるのか」。非常にシンプルな問いです。Whyですね、Why。なぜ、何のために自分は今ここにいるのか、これから数時間過ごそうとしているのか。何をしたいのか、何をつくり出したいのか。ここから入っていきたくらいかなと思っています。これを全員語っていただくということをやっていきたくらいかなと思っています。

一人3分ぐらいは語りたくらいかなと思いますが、当然ここで一人ずつ語ったら、もうそれだけで時間が終わっちゃうのでそんなことしませんが、この

後ペアになって語っていただきたいと思います。その語りの型を少しだけ、今日ゲーム的に用意してみました。現在・過去・未来・今日、こんな起承転結で、私の今日のインテンション（意図）に関して語るということをチャレンジしてみたいかなと思います。

「現在」というのは、今、最近の話。例えば僕の場合、この四つで起承転結の作文を簡単にしてみたいと思います。「現在」、今の教育の魅力化ということで、学校をより魅力的な教育の場に変えていきましょう、変革をしていきましょう、そんなことをさせてもらっています。島根県全体の学校でそういったことを地域と一緒に引き出していきこうと、そういうことをさせてもらっています。

そういうことをこの10年ぐらいさせてもらってきたんですけども、6年ぐらい前だと思うんですけども、高知県に来させていただきました。ほんとに苦しくて困っていた、なかなかうまくいかないというときに、嶺北高校も見に行かせていただきましたし、土佐市も行きまして、黒潮町にも行かせていただいて、たくさんいろんな地域から学ばせていただきました。

それで今があるわけですので、今後これからはこういう学校と地域が一緒になって魅力ある教育をやっていく、もしくは、ほんとに地域を元気にする教育、将来の地域をつくり出していく、そういう人づくりを地方創生がいわれる中の一つとして、新たな地方創生の取り組みの視点として、全国に発信をさせていきたいと考えているところです。

そうした中で、今日はこういった機会をいただきまして、6年前いろいろ学ばせていただいたものが、その後どうなったのかということのご報告や、学ばせていただいたものに対して、また多少なりとも何か恩返しができたらと思っていますし、今後、各学校、各地域だけではなくて、全国的なメインにしていくとか、地域をまたいだ連携とか協働の中で、ある意味相乗効果で社会的なインパクトを与えていくとかいうことを考えたとき、島根県、高知県一緒になってやれることなどを模索していきたいと、そんな思い、願いを持って、今日この場にいらしていただいております。

そういったような感じで、最近という直近の話から、そこに至る過去の話、そして未来の話があって、それをつなぐ今日の意図というような流れですね。それぞれ自分のストーリーの中で、今日がどう位置付いているのかということをお話いただければなと思っています。

それでは、大変申し訳ないんですけども、全員ご起立いただいてもよろしいでしょうか。今からペア、二人組をつくっていただきたいと思うんですけども、二人組の条件は知らない人と組んでいただけたらと思います。隣の人はよく知ってる人かもしれませんが、多分周りを見回したらまだよく知らないという方、しゃべったことがないという方がたくさんいらっしゃると思いますので、そういった方

と「じゃあ、よろしくお願ひします」と言って、イスとかをちょっと動かしてもらっても構いませんので、近くの前後とか左右とか横に座っていただき、イスを動かしたりとかして移動してもらって構いません。

ペアができたら近くに座って、自己紹介、雑談をしておいてください。これに関してはまだやらなくてもいいです。1分ぐらいで全員が座り終わって、ペアできて少し雑談して場が少しあったまってる、そんな1分後になればと思います。よろしいでしょうか。それでは、ぱつと知らない人とお二人組になっていただければと思います。どうぞよろしくお願ひします。

・・・ ペア作り ・・・

それでは、ペアでジャンケンをして勝ち負けを決めてもらってよろしいでしょうか。よろしくお願ひします。最初はグー、ジャンケンポンで。

そしたら、ジャンケンで勝った方、手を挙げていただいてよろしいでしょうか。それでは、ジャンケンで勝った方が最初に、この「何のために、私は今日ここにいるのか」をこの型を参考に、この型に縛られる必要はありません。型破りで構いません。一つの参考程度に、自分の今とか、そしてこれからどんな問題意識持ってるのか、そしてこういうことを



やっていきたい、そのために今日こんなことを学びたい、こういう自分のストーリーにおいての今日の「一体何のために、何を得たくて、何をつくり出すためにここにいるのか」ということを、これら参考にしながら熱く語ってください。

熱く、何か人に誘われたからよく分からないけど来ちゃいましたみたいな、それもきっかけとしては全然オーケーなんですけども、それはあくまでもきっかけで、ただ、今日ここにいる意図を明確に深く持ちましょうということです。きっかけではなくて、自分の意図をここで語るということです。

ジャンケンで負けた方、手を挙げていただけますか。ジャンケンで負けた方、最初聞き役をやっていたかと思えます。これ、語り役以上に聞き役が重要なんです。聞き役の役割は、非常によく聞くという役割です。今までの人生でこんなにも本気で人の話をよく聞いたことないぞというぐらいの3分間、相手に興味・関心を持って、笑顔でうなずきながら、相づちを打ったりしながら、多分知らない人とペアになっているので気まづいはずなんです、ほんとは。居心地が悪いとか緊張感があるとか、でもそれを何とか苦笑いでごまかしてるとか、いろんなものがこの二人の間にあるはずなんです。

それもすべて聞き役がちゃんと相手に敬意と興味を持って、しっかり受け止めながら、受け入れながら聞いていくと自然と3分の間にそれが大分消えて、居心地の悪さとか、それが消えていくはずなんです。聞き役がちゃんと、相手に興味・関心を抱きながらほんとにしっかり聞いていると、語り手は今頭の中にそんなこと考えていなくても、聞き役の聞き方に引き出されて、思ってもいない言葉とか思いがあふれてくるとか、言葉がつむぎ出されてくる、そういうことがありますので、聞き役がどれほどちゃんと、次、自分が何しゃべろうかなとかそんなことを考えるのではなく、3分間相手のためにしっかり聞くということをやっていたらと思います。

相手が大体ちゃんと語り終えてしまった。まだ3分に少し時間があるということで、可能であれば、聞き役の方がその中で生まれてきた問い、質問を語り手の方に「どうしてそう思われたんですか」とか、質問される分にはオーケーです。質問も含めた聞き

方をして、気持ちよくやっていただければと思います。

ということで、3分経ったら、「3分経ちましたので、話し役と聞き役交代してください」と声をかけますので、切りがいいところで話し役・聞き役交代して、またちゃんと語る人は語る、聞く人は聞くということで、合計6分間いきたいと思えます。

今バァーッと説明してしまいましたけど、ちょっと意味がよく分からなかったとか、もうちょっとこ説明してくれないと入れないという方いれば手を挙げていただきたい。大丈夫ですか。ペアは全員いますか。

それでは、まず話しやすいように姿勢とか向きとか距離とか角度とか笑顔とか、ちょっとその辺をつくっていただいて、「よろしくお願いします」、気持ちいいあいさつでいきたいと思えます。それでは、どうぞよろしくお願いします。

・・・ ペアで話 ・・・



それでは6分経ちましたので、お互いにどうか感謝のお礼を述べて、席に戻っていただければと思います。どうもありがとうございました。

話し足りなかった方は、落ち着いた場でまたつながりを深めてもらえたらと思います。

大体皆さん、意図が少し明確になった方もいれば、大体こういうテーマでお話ししてくださいと言っても、それと全く関係ないことを話すというのがこういう場の定石ですので、半分以上の方は全く関係ないことを話していたんじゃないかなというふうに聞こえてましたけども、いずれにしろ、先ほど

やっていた聞いて聞き方なんかは、この後僕もお話しさせていただけますけども、そのときもぜひこんないい聞き方で人の話聞いたことないというような形で聞いていただければ、こちらもしやすくなりますし、シンポジウム全体を通して、皆さんがほんとに来た目的や欲しいものが得られるような場に全員でしていけたらと、いろんな質問の機会だとかそういったものもあると思いますので、そういった形で場を一緒につくられたらと思いますのでよろしくをお願いします。

まず、この「教育力」ということで、若者の流出を止めるということですが、私自身がかかわらせてもらってきた取り組みを紹介させていただきながら、どういうふうにしたらいいのか、当然僕自身も試行錯誤の途中ですけども、それを一緒に考えるきっかけにできたらと思いますのでよろしく願いいたします。

それでは、僕がこの高知県に学びに来させていただいた当時、6年ぐらい前ですけども、大体どんな状況だったのか、ちょっとその紹介から入らせていただきたいと思います。

当時、僕は島根県隠岐諸島の島前地域、三つの町村でできている地域ですが、その地域にいました。その地域はすごい勢いで人口減少・少子化が起きていて、この三つの町村の合計、15歳の人口のグラフですけども、どんどん子どもの数が減っていったら、そういう事態になっていました。12年間で子どもの数が半分以下に減っていました。

子どもの数が減れば、当然その地域にある高校、学校に入学する子どもの数も合わせて減っていったというところなんです。この島前地域、島前3町村には一つしか高校がない。島根県立隠岐島前高校という高校でしたけども、その高校の生徒数が減って、このままいくと児童対応のあれでつぶれていくね、再編になっていくねと、そういう状況が見えていました。

このまま何もしないと数年後、10年もたないという中で、地域というのはそのあたりはどうなるのかなということを考えてみると、これ海士町、その島前地域の高校が建っている町の人口構成ですけども、この15歳～19歳、これみんな高校がなく

なれば当然ですけどもこの地域から出ていくと、ほかの地域の高校に通う。島前の場合、家から通う高校ってありませんので、ほかのこの下宿だとか寮に入っていくということで、ここもみんないなくなります。

それだけじゃなくて、大体高校3年間、下宿はもっと高いですけども、寮生活送っても、卒業するまでに3年間どれくらい要るか、大体350万ぐらい掛かるということです。地元の地区の、子ども二人とか三人とかいる保護者さんたちと話をすると、よく言われるのが、「高校がなくなったらもうこの地域を出ています」、「ここでなかなか暮らしていけない」と。「島根県の松江とかに出て行ってそこで仕事見つけて、家から子どもたちを高校までは通わせませう」ということを言います。つまり高校がなくなったら、この層がいなくなるだけではなくて、この層の若い人たちが子どもと一緒にどんどん流出していく。そういうことが起こっていくわけです。

この海士町の、この島前の地域の経営戦略全体どういったものかを、簡単にいうと、新しい産業創出、雇用創出に従って、この若い層に子どもたちと一緒にUターンとかIターンで来てもらいたいということです。このへこんでいる方たちに来てもらって、この人口構成をバランスよくさせていきたい。それで地域をちゃんと残していきたい、継続していきたい。地域の文化や祭りごとを継承していきたい。それが大きな戦略でやってましたけども、学校がなくなれば、もう学校がないような地域に子どもたちを連れてUターンだとかIターンで帰ってくる。これ非常に考えがたいということになっていきます。

学校がなくなることで、どんどん先細りしていったら、地域全体が消滅へと向かっていく、もしくはその消滅が加速をしていくということです。学校の存続自体が実はその地域の存続と非常に直結した問題であるということが見えてきたわけです。意外と学校はその地域の定住における、見えにくいけども中心になっている。気づきにくい中心になっているということが分かってきました。

それを裏づけるデータですが、データなんか見な

くても大体、高校があるかないか、小学校がその地域にあるかないかで人口の減少率が大きく違うというような話だと思うんですね。やっぱり都市集落の消滅要因とか、定住と移住要件なんかにはこの学校というのはかなり高い割合で入ってきているということですけども、そんな状況でした。

じゃあ一定地域や学校に目を向けてみると、地域と距離が遠いというのは別に物理的な距離ではなくて、非常に心理的な壁が高い。地域の方たちも小学校とかは入りやすくて、高校といってもなかなか行けませんね。島前高校の教員なんかは、高校が丘の上にあったので、山から教員なんかは町に、里に下りてこないというような言われ方をずっとされてきましたけども、非常に教員と地域の距離も遠かったですし、学校に地域の方たちが行くという機会もほとんどない、情報等もない、そんな状況でした。

学校がこのままだと廃校になっていく、再編されていくということに対して、教員の当事者意識、これは当時は低かった。ないといったら語弊がありますが、低かったです。理由は、こういうへき地の高校のように、教諭で地元出身が一人だけ、あとはみんな遠くから単身赴任で来られていました。長くても3年、早くても1年で入れ替わっていきます。管理職は2年で替わっていきます。

そうしたときに、なかなか教員がこの学校を何とかしたいと思いきいわけですね。当然ですけど

も、生徒は何とかしたい、目の前の生徒を何とかしたい。これはものすごい情熱を持ってやっています。これは自信を持って言えるんですけども、生徒を何とかしたいと思うけども、この学校が、1年後2年後というより、もう5年後になくなると、それはもう自分のビジネスではない、自分の仕事の範ちゅうではない。それはやっぱり興味・関心の範囲から出ちゃってるわけですね、学校がどうなるか。ましてや、それが地域にどんな影響を与えるか。そんなことは先生方の範ちゅうとしては認識されてなかったわけですね。

行政といっても、地元の町村も、これ県立高校だからということでそれは県が考えることだと、私たちは町村だから小学校・中学校はやるけども県立は全く話が違いますよということで、町村の行政なんか、議員も含めてですね、当事者意識がほとんどありませんでした。何とかしないとまずいよねえぐらい。自分たちがかかわるというような意識を持った人なんかは実はほとんどいなかったです。

また、この高校、島前って三つの町村にまたがって通ってるんですけども、この町村同士が意外と仲が悪くなってまして、合併するしないみたいな話があったようでして、これ意外とこちらがこの地域の中で一体何をやるのか、あっちがやってるからあまり協力したくないとか、そういったことがあるわけですね。高知県でもたくさん起きてるかなと思いま



したけれど、今、そういうことがありますし、町村と県ということの壁も非常に高いということで、誰も当事者意識を持って、責任持って、もしくは覚悟を持ってこれへ取り組もうという方がなかなか生まれにくい構造があったということです。

ただ、このまま座して死を待つわけにはいかないということで、問題意識を持った地域の方に僕は声をかけられて、それでこの島に来てこのプロジェクトにかかわり始めることになったというような状況なんです。そのとき、地域の方たちとつくったのが「魅力化プロジェクト」ということで、生徒が「行きたい」、保護者が「行かせたい」、そして地域もこの学校、地域の宝だから「活かしていきたい」とそう思う「魅力」ある学校に変えていきましょう、みんなで作っていきましょう、こういうプロジェクトでした。

その背景を思いとした、ここに学校存続の「危機」。「危機」というのはそれが「好機」だと。ピンチはチャンスだと。人の中には変わっていきたくない、変わりたくない、変化というものに対してものすごい抵抗感があるわけですね。じゃあその抵抗感を乗り越えてでもってどこまで変わっていきとき、その追い風になるものは何かというと、一つは「危機感」なわけです。このままでは駄目だという危機感に変革を後押しするわけですので、危機はあるもの、危機は見えやすいもの、もしくは危機にさらされているものというのは変わっていく、変革が起きていく、そういう非常にチャンスのある時期であってポイントであるということで、この学校存続の危機を地域創生のチャンスというふうに捉えてかかわっていきましょう。

まちづくりや人づくりにおいて高校なんてのは、学校の教育もそうですけども、あんまり相手にされてこなかったわけですね、まちづくりの文脈において。ましてや高校というのは全く相手にされてない。ここ、盲点ですね。逆に、転換というふうに捉えよう。この地域の若者たちは、高校卒業時には97%以上、地域外に出ていくと、進学、大学・専門学校ありませんから、就職も含めて、高校を卒業するとこの地域から出ていく。

最後の出口の3年間を握ってる地域の最高学府が

高校だったわけです。この最高学府の出口になってる高校を拠点にすることで、今までの人の流れ、外に行って帰ってこないという流れが変わる大切なポイントになるということで、これを拠点というふうに捉えて取り組みを開始してる。

ただ、学校の現場を見てみると、当時、生徒数が減って教職員の数が減ってました。教員の数は3年間で4割ぐらい減りました。学校は非常に多忙で、何か新しいことをやるとか、もうそんなことできない。今までやってきたことさえ維持できない。そういう状況に陥ってました。だから、学校に何かやってくださいと言っても、動きたくても動けない。そういう状況でありました。

じゃあどうするのかということで、これは学校だけにお任せしてはいかん、学校だけに責任をなすりつけちゃ駄目だと。これは学校だけの問題じゃなく、地域全体の問題だというふうに捉えて、地域総掛かりでこれを何とかしていくような推進母体、体制をつくって、取り組みを始めるということで、学校そして行政、教育委員会、議会、PTAとか民間の地域の方たち、卒業生会等々を含めた会をつくって、その中で本当にこれからどんな地域にしていきたいのか。そのためにどんな人が必要なのか。そのためにどんな教育が必要で、そのためにどんな学校である必要があるのか。こういったことをずっと対話の中で共通ビジョンをつくり出していきたいと、そんな過程を踏みました。といったことが当時の状況でした。

ずっと聞いていると何かお疲れになってくるかと思しますので、当時、その協議会、学校と地域、一緒にやれないか。例えばどんな協議体制で議論を進めてきたかということ、今日皆さんにも一緒に考えていけたらと思います。

こういった例えばの例です。これからの地域の未来を考えたとき、これからの地域を切り開いていく若者ってどんな若者なんだろう。これからのこの地域に必要な若者、その若者が持っている資質や能力は一体どんなものなんだろうかという、これからほんとに人づくりをうまくつくっていききたい、このビジョンですね。そして、そういう若者を地域が責任を持って育てていくとしたときに、どんな教育

が、どんな経験やどんな活動を子どもたちもしくは大人たちがしていくことで、そういった若者がこの地域で育っていくのか、どんな教育が必要なのか、こんなことを考えたりして話し合ったりしていきました。

では、もう一度、皆さんであればどう考えるのか。ここでいう地域は、皆さんが考える地域で構いません。それは高知県かもしれないし、皆さんの市、町かもしれないですし、もっと小さい範囲かもしれない。それはどこでも構いません。皆さんが地域だと思う場所、もしくはふるさとだと思う場所でイメージしたときに、その地域の未来を切り開いていくためには、どんな若者がこれから必要になってくるとお思いますか。そのような若者を育てていくには、どんな教育や活動、経験を子どもたちもしくは若者たちに提供していくことで、そういった若者たちが育っていくとお思いますかということです。

それでは、大変申し訳ありません。もう一度だけご起立いただいてよろしいでしょうか。また、ペアをつくり替えたいとおと思いますが、今度のペアはさっきとまたちょっと変えて、こういう機会がなかったら多分しゃべらないだろうという、自分と立場とか状況とか既にもう持っている背景とか価値観とかが恐らく違うだろうという方を選んで、ペアになっていただけたらとお思います。

若い方は年輩の方とか、男性の方は女性の方とか、ちょっと異なる、こういう機会がなければ特に自分から話しかけないとか、ペアになるということは一生ないだろうという方を周りで見つけて、二人組になっていただいて、また簡単に自己紹介だけ座ってしておいていただけたらとお思います。

それでは、じゃあ1分ぐらいでつくってみてください。よろしくお祈いします。自分ではなかなか出会わないであろう人と出会ってください。

●● ペア作り ●●

そしたら1分ほど経ちましたけど、あと1分ぐらいでお互いの自己紹介を終えていただければとお思います。

●● ペア自己紹介 ●●

それでは、今からペアでこのお題について対話をしていただけたらとお思います。合計4分間取りますので、お互いそれぞれの考えを共有しながら、今後の地域を考えたらこういう若者必要だよ。そして、そういう若者育てるにはこういう教育とか活動とか経験が大事だよ。というのを、お互いの考えを共有しながら、これとこれはお互い共通するね。みたいなものがあれば、その共通するイメージとかを見つけてもらえればいいとお思いますし、異なるものがあれば異なって構いませんが、お互いの考えを共有して、これはすごいこれから大事だよ。というものを対話の中でちょっと見出していただけたらとお思います。

4分ほど時間を取りたいとお思います。進め方はペアにお任せしますので、一人がずっとしゃべって4分が終わってしまったみたいなの、そういうことだけはないように、最初に僕がしゃべります、じゃあ次どうぞとかって、お互いが相手を聞き合いながら語り合っていただけたらとお思います。よろしいでしょうか。4分でお互いの思いをまず共有して、共通点とか大事なポイントが見えたら、それを見つけておいてくださいということです。

それでは、話しやすい姿勢、体制、距離とか雰囲気つくっていただいて、また気持ちいい笑顔のあいさつで始めていきたいとお思います。それでは、どうぞ4分間お祈いします。

●● ペアでの話 ●●



では、ペアでどんな話が出たのか、全体で共有できたかなと思います。今日大学生が7人来てくれるということで、ちょっと2人前に出てもらえますか。今から会場の皆様に、これから地域考えたらこんな若者が必要だ、そういった若者を育てるにはこんな教育とか活動が必要なんだという、皆さんの持論を簡潔に語っていただきますので、要点、ポイントだけ、2人で手分けして書いていただければありがたいです。

それでは、ぜひ全体で共有いただけたらと思います。ポイントは、要点を簡潔にはっきり言って結論だけ、こんな若者とかこんな資質・能力がこれから重要なんだ、地域を考えたら、そのためにはこういう活動だ、こういう教育だ、こういう経験が必要なんだという結論だけをです。これ理由とか、私は小さいころそうだったんだみたいな話が入ると、それだけでものすごい時間になりますので、それはもうそれぞれで語っていただきたいと思いますので、どんどんご意見をいただけたらと思います。

では、どなたからでも挙手でも言えるのかな。高知県で通用するのかわちょっと分からないんですけども、どうなんでしょうか。

(参加者1)

言わせていただきたいと思います。

窪川高校の浜田といいます。やはり自分の言葉で語れる。

(岩本)

ああ自分の言葉で

(参加者1)

ええ、自分の言葉で語れる、そういう若者を育てていくべきだと思います。

(岩本)

はい。じゃあ、自分の言葉で語れる若者を育てるためにはどんな教育活動とかが重要でしょうか。

(参加者1)

地域の中に、地域に対する熱い思いというのはも

ちろんですけども、私、高校ですので、教科の中でも自分で問いを見つける、そういった訓練を普段の中でしていくことが、地域の課題を見つけることになるんじゃないかなと。

(岩本)

なるほど。授業の中で自分の問いを見つけていくような、そういった教育が必要だと。じゃあ、次。

(参加者2)

どういう若者かという、まず地域のことを好きな若者。

(岩本)

地域のことを好きな若者、ああ、いいですね。

(参加者2)

それから、たくましい若者。

(岩本)

たくましい。

(参加者2)

そのためにどんな教育が必要かという、やはりその地域のことを好きになってもらうために、地域の歴史とか祭りとかに参加してもらう、そういう教育が必要だと。

(岩本)

なるほど

(参加者2)

それから、たくましい若者に育ってもらうためには、いろんな多世代の年代と交流してもまれていくとか、そういう教育が必要ではないかということになりました。

(岩本)

はい、ありがとうございます。いいですね。異年齢、さまざまな交流、もまれる経験が必要だと。今日、きっとそういう場に高校生たち、なればいいか

など。

(参加者3)

どんな若者かという、物怖じせずどんなことにも積極的に行動できるような

(岩本)

なるほど、まさにそういう感じですね。ペアで発言できるなんてすばらしいじゃないですか。どうしたらそんな若者が生み出せるのか。

(参加者3)

一応何か学校とか教育という部分をおっしゃっていたと思うんですけど、勉強というのを学問というふうにとらわれずに、もっともっといろいろなことを経験できるような活動に重点を置けるようになったらなど。

(岩本)

なるほど。ありがとうございます。じゃあ、どうぞよろしく。

(参加者4)

いいですか。自己肯定感の高い若者。

(岩本)

ああ、自己肯定感の高い若者を育てたい。どうしたら育てられるでしょう。

(参加者4)

ありのままを無条件に肯定する教育。

(岩本)

なるほど、ありのままを無条件に肯定するような、そういった教育なり環境が重要だと。それ以外で、はい、お願いします。

(参加者5)

どんな若者かということで、例えばお年寄りだったり自分の親だったり、周りの人を使いこなせるような若者ということで、そういう意味でどんな教

育が必要かということは、例えば起業であったりとか、そういう自分で稼ぐ力をつけたりとかっていう、自分で生きる力を持てるような教育が必要だと。

(岩本)

なるほど、ありがとうございます。あと、これだけは言いたいとかっていう人。じゃあ、お願いします。

(参加者6)

その地域といってもなかなか限定される場所があるんですが、田舎のほうへ行くほど企業がないので、自分で物事を考えて行動するという、こういう若者がいいと思うんです。

(岩本)

なるほど。

(参加者6)

そのためには、学校の先生ばかり悪く言うんじゃないですけど、サラリーマンなのでやっぱり組織に使われてる立場なので、自分で判断して自分で系統立てて行動していくのには、地域のそういう会社の経営者とか、農業の経営者とか、自分でやる人に先生になって教育してもらおう。今の教育学部も現場へ行って習うといいと。

(岩本)

なるほど、ありがとうございます。そしたら、いろいろ出ましたので。じゃあせっかく書いてくれたので、お二人がするのであれば、実はこんな若者を目指してるんだとか、そのためにこんな学び方をいつもやってるんだとかということがあれば。どうぞ。



(学生1)

僕は創造力がある若者がいいなと思ってます。というのは、結局創造力ある若者で、どんな教育が必要かという、やっぱりこの学校の学

問というのは基本的に決まった形があるので、それをこう身につけ、学ぶというか、そういうのが多いんですけど、そうじゃなくて、もっとこう機会的にとかどンドン広げていくっていうことを、やっぱり社会では求められる能力なんですけど、それが高校までにはないので、そういった創造性を広げていくっていうことを教育の中でもっと力を入れたらいいかなと思っています。

(岩本)

ありがとうございます。じゃあ、はい。



(学生2)

私は、自分が今大学で学ぶ若者としてのステップとしてどんな能力が欲しいかといわれると、やっぱり人としゃべってかかわる能力っていうのが一番大事じゃないかなと思っています、人としゃべれない、コミュニケーションがとれないとどうしても自分の世界っていうのは閉じてしまうので、こういう機会もそうなんですけど、いろんな人と交流する能力っていうのはすごくいいなと思っています。

どんな教育がいいか。私は、自分が座って授業を受けたり、座って黒板を見て文字を書くというのがすごい苦手なタイプです。なので、こんなふうにこういう講演会でもいろんな人と席立ってかかわってとか、地域協働学部に通っているの、実際に地域に出て自分の身をもって体験することっていうのがすごく、現場で学んでいくっていうの、すごい自分の力になってるなって感じているので、高校とかでもそういう教育が増えていってくれたらなと思います。

(岩本)

ありがとうございます。じゃあ、それぞれの方、ペアの方にお礼を言って、また席にお戻りください。

地域協働学部っていいですね、何かまさにぴったりの学生が入ってくるんですね。机にかじりつくよ

うな勉強は苦手けども、地域でこうやって活動できるとかコミュニケーション、そういったのがほんとにできる学生さんが育ってるなっていうのを今感じましたし、あと、高知の方たちってすごいなと思ったのは、結構ちゃんと結論を明確に言っていたらいいですね。恐らくほかの県とかでやると、大抵いろんな理由だとか自分の経験談みたいなことをついしゃべりだして、ポイントがよく分からないままに3分4分流れてしまってというのがよくあるんですけど、今回は全くそれがなく、しっかりポイントを言っていたらいいということで、今日来られてる方たちのレベルの高さがまさに表れたなというふうに感じました。ありがとうございます。

ちょっと今こういう形で出させていただきました。我々も2年間とかかけてこういった話し合いを重ねながらいろいろ考えたんですけども、非常に共通するものばかりだなと感じています。

では僕らは、その島前という場所でどういうふうを考えて、それでどんな教育を実際にトライしているのかということ、最後ちょっと簡単に紹介をさせていただいて、このセクションを終わりにしたいと思います。そしたら少しだけ電気を落としてもらっていいですか。

島前でこういった話し合い、まさにこういった会を重ねていったんですけども、そのときどう考えたかということ、まず地域のニーズとか現状とか、そして未来とかを考えました。地域の既存の産業がどんどん衰退している、若い人たちがどんどん出ていけると、そういった悪循環がぐるぐる回ると公共依存に絡め取られる。

こういった状況から、地域がこれから新しい産業とか雇用を生み出していきたい。若い人たちがちゃんと住めるような、そして自立、協働できるような、そういった地域にしていきたいとしたときに、この今の悪循環から向かっていきたい好循環、未来のこのギャップを埋めるにはどんな若者が必要なんだろうか、どんな資質や能力が必要なんだろうかというのを話し合った結果出てきたのが、地域で自ら生業だとか事業を創り出せる人材がこれから必要だと。

そして10年後20年後を見据えたときに、地域

起業家的精神と書いてますけど、地域で事を起こす、別に会社をおこすとかビジネスをやるとかいう狭い意味だけではなくて、自ら事を起こしていく気構えですね、地域をしっかり知っていて、地に足をつけながら、もしくは地域のことを愛し、好きである。かつグローバルな広い範囲で世界的な視野、もしくは地域にいながら世界ともビジネスができる、世界ともつながっていける、そういった発想とかを持てるような人材がこれから地域でみんなで作っていける、そういった若者であると。こんなような話し合いが出てきました。

具体的にいうと、若い人たちはどんどん外に出て行って帰ってこないの、どうして帰らないのかというのをいろいろ聞いていくと、仕事がないから帰れない、帰りたい、地元のことが好きだ、でも仕事がないから帰れない。大阪や東京へ行ったら仕事がたくさんある、いい仕事がたくさんある、企業がいい仕事もある、だからだと。これ、若い人たちも言うし、地元へ残ってる人たちも言うわけですね、だから帰れないんだと。

こういう発想から、じゃあこういった若者を育てていったら、若者はどう変わっていくのか。どんな言葉で語れるような若者が僕らのイメージなのかというのを議論していった。仕事がないから帰れないのか。仕事が少ない、雇用も減っている、分かっています。だからこそ、自分たちが帰ってきてやりたいんですよと。仕事がないから帰れないのではなくて、仕事をつくりたいんだ。自分たちへのオプションをつくっていききたい。仕事をつくっていききたい。地域を元気にしていきたい。そういった厳しい状況は知っています。だから、自分たちは力をつけて帰ってきたいんですと。

そういう気概を持った若者を育てていけない限り、誰かが雇用の場をつくってくれたら。ここで雇用って、行政、農協、漁協、もしくは銀行とか新聞社だとか、そういう安定したようなところのイメージが今まで多かったんですけども、地方でこれから先もそういった安定した、公共的な雇用とかがどんどん増えていくような時代は、恐らくこの人口減少の中で来ると信じている人はもうほとんどいないと思います。これからは、誰かがやってくれば帰れる

のになと言つてれば、そのいつかはもう来ないわけですよ。そうではない、自分たちでつくるんだと。こういう気概を育てていかない限り、この右肩下りの時代、依存の循環からは抜け出せない。

じゃあ、そういった若者を育てていこうとしたときに、そこにかかわる大人もなるべく意識を変えていかなきゃいけないんじゃないかということ話をしていました。その象徴的なものが、自分たちの持っている地域観とかふるさと観自体を変えていく必要がある。20世紀のふるさと観といったとき、「ふるさと」という歌、唱歌ですね、あれはちょうど今から101年前に当時の文部省が唱歌として作った歌ですね、「兎追ひし彼の山」、あの歌です。ふるさとの3番の歌詞は、「志を果たして いつの日にか帰らん」ですね。志を果たしていつの日にか帰る場所がふるさとだというふうに歌われた100年間だったわけですね。

当時のふるさと観は、まさにこれだったわけですので、志を果たすのはどこか、中央、都だったわけですよ。地方の志ある者、意欲や能力がある者は都へ行けと、中央集権行政を進めていた当時の時代ですから、それをやってきたわけですよ。地方は、どんどん意欲・能力のある若者を中央に送り出してきたわけですよ。ふるさとというのは、志を果たし終わった後に帰る、もしくは志半ばにして挫けたときに帰る、そういったような場所だというような認識がどこかで、ずっとすり込まれてきたわけですよ、この100年間。

ふるさとで志を果たすとか、ふるさとで自己実現する、ふるさとでチャレンジする、ふるさとで夢をかなえる。こういうふるさと観というのは、この100年間なかなか日本人の中では語られてこなかった、中央集権の中で。でも、もうそれを変えていかなきゃいけないよね。今こういう時代になってる中で、ふるさとでだって世界と勝負していける。こういう地域だっていける、もしくはふるさとだからこそできるやり方だってある。そういう時代が来ている中で、もう100年経った、もうこのふるさと観を次の時代変えていかなきゃいけない。

それが何かといたら、21世紀のふるさと観は、志を果たしにいつの日にか帰る場所だというふ

るさと観を持って、我々もかかわっていこうということをやっています。僕ら、よくいろんな会が終わった後に飲み会をやるわけです。そのときに、やっぱり「ふるさと」を歌うわけですね。そのときの歌詞の3番は「志を果たしに いつの日にか帰らん」ふるさとへ。

島前高校の卒業式はいつも3月1日です。卒業式の日、卒業生も来賓も保護者も在校生も全員含めて、卒業式終わった後はその場で「ふるさと」の大合唱。そのときの歌詞、3番は「志を果たしに いつの日にか帰らん」ふるさとへと行って卒業していく。こういうことをしながら、我々自身もそうですし、若者を含めて、ふるさと観をこれから変えていくということで歌い続けていっているということです。

そんなことをしながら、若者を育てていこうということをやっています。そのときの発想は、学校は教職員の数も減って、施設も非常にぼろい、音楽室には楽器がない、理科室には実験道具がない、そういう学校です。ですが、地域全体を学校だというふうに捉えると、いろんな施設があるじゃないか。そういったものをふんだんに活用しよう。教職員の人が4割削減された。でも、地域を見たらいろんな保護者の人たちがたくさんいるじゃないか。そういった人たちにも先生としてかかわってもらおう。先ほどまきに出ましたが、そういった発想で学びを捉え直していこうということです。

先ほどの地域協働学部の学生さんも言われてましたけども、座学的な学びだけではなくて、実際の現場に出て行って、地域づくり、まちづくりを高校生とやっていく。その中で必要なことを学び取っていく、もしくは学んだことをちゃんと自分だけにとどめず、ペーパーに落とすだけではなくて、実際の身の回りや地域、社会の中で活用していく。この循環が回るような学びをデザインしていこうということをやっています。

それで、地域とかと一緒にあって、このカリキュラムの中で位置づけていこうということで、机上の空論、話し合いだけで、地域の課題はこうだ、だからこうしたらいい、そんな経緯で終わらないように、まず現場でしっかり鍛えるということで、1年

生の家庭科とかいろんな授業があるんですけど、そういった中で現場にどんどん出ていって、地域の厳しい現状や魅力とか加味していく、そして聞いていく、かかわっていく、交流していく。

そういった中で、また地域以外で、その場所でのいろんな活躍だとか生き方、働き方、課題解決の方法、あり方を生み出していく方たちがいる。そういった方たちともロールモデルとたくさん出会いながら、じゃあ自分たちはこの地域で何ができるのか。もしくは自分たちの興味を持ったこの課題に対して、自分たちはどういうプロジェクトができるんだろうかということ、プロジェクトをつくって、課題解決を実践していくと。

その過程の中で、2年生全員が地域の方たちのご支援を多大にいただきながら、この地域、3町村の高校2年生、島前高校2年生を全員シンガポールに行かせてもらうということで、シンガポールも島ですので、この島前地域と全く真逆の価値観で、真逆の開発を進めてる島にあえて全員を若いころに体験できるようにすると。全く異なる価値観や文化に彼らが浸ることによって、今いるこの場所の価値や魅力や課題みたいなものを客観的に、また相対的に感じられるような機会をつくっていくということをやっていますし、シンガポールの東大みたいなところがあるんですけども、そういったところで生徒たちが、中学校の段階では日本語で、高校生になれば今度英語を学んでますので、英語で向こうの大学の学生とかに自分たちの地域のプレゼンテーションだとかやっているプロジェクトを提案して、それに対してさまざまな意見などをもらって、その自分たちの興味があるテーマの現場にフィールドワークで行ったりしながら帰ってくる。

そんなことをやりながら、じゃあ自分たちの地域、どうやって海外にもその魅力を発信してインバウンドの観光ができるのだろうかとか、この地域のエネルギーの自給率を高めていくためにこういった仕組みが必要なのだろうか、それを海外の企業とかフィンランドとか、そういったところの事例とかいろいろ調べたり、話聞いたりしながら、上級生に提案していくだとか、それから観光ツアーとか自分たちで企画して実現していくとか、そんなことを授業

の中でやったり、部活を通してやったりということ、さまざまな時間を使って活動していくということをやっています。そういった中で、高校生だけでなく地域の方たちも一緒になって、地域の方たちに助けをもらいながら一緒にさせてもらいながら進んでいっているというところです。

あとは、学校だけでこういうことを全部やってくださいと言っても、学校も先ほども言いましたが、教職員非常に多忙なので、全部抱え込むというのは非常にきつい。じゃあ地域ができることは地域でやろうということで、21世紀型の新たな寺子屋というものを立ち上げて、公立塾「学習センター」という形でやっています。これは学校の授業に対して、その予習・復習もそうですし、学校の授業になかなかついていけない子たちなんかには、もうちょっと中学校と小学校をつなぐようなところから学び直しができるようにするとか、もっともっと高いレベルで学びたいと、もっと高いレベルの大学だとか、そういったものを目指している子にはそのレベルの学びができるような環境をつくるか、そうすると学校と寺子屋で相乗効果を発揮するような仕組みをつくりながら、地域の課題解決に取り組んでいく、そういったプロジェクト型の学習、そういったゼミ活動などもやりながら進めていっています。

最後に、よくこういった地域の変革のとき、若者たちそしてその世代の課題というのを結構見たり、聞いたりしているんですけども、生まれ育ったときからずっと同じような人間関係で育ってきますので、人間関係は固定化していて、価値観もかなり同質化していくと。で、序列みたいな、いつもあいつが1番、自分は3番とか、序列化が起きている。そういう中でなかなか刺激や競争が起きにくい。多様な異なる価値観を持った人たちと協働していくということが、そういった態度やスキルができない。

何か異なるものは悪いものだとか、よそ者を排除しようとか、新しい考えをなかなか受け入れられない。そういった形になりがちになってくる。クリエイティブな発想とか広い視野で物事を見ることができず、今までこうだったからこうなんだというふうになりがちだと。自立心やチャレンジ精神が強い子どもたち、若者たちほど、こんなところにいたら自

分は伸びない、面白くない、つぶされる。だから、もっと都会に行けば、もっとチャレンジできる、もっと自由にやれる。ここにいたら、いつもそういった、何だあいつとか、いい格好してとかいろんなこと言われてできない、刺激や競争がないということで、チャレンジ精神ある若者ほど都会に出ていく、都市に出ていくと、こういったことが起きていたわけです。

こういった構造を変えられないかというので始めたのが、じゃあ逆に、全国からここに意志ある脱藩生を募集しようということで、今まで外に出ていたけど、脱藩生来いと。イノベーターとかチャレンジ精神あるやつはここに集まると。まちづくりのポイントでよく言われるのは、よそ者、若者、ばか者ですね。それを教育の現場にも引き込んでいくということで、学校の中に多様性を引き込んで、多様な子たちがいろいろぶつかり合いながら、溝だとかけんかとか人間関係のいろんなものを経験しながら、3年間そういう場所で大変な思いをしながら、ほんとに異なる価値観を持った人たちとどうやって一緒に協働していくのかということ、身を持って学べるような教育環境をつくらうということで始めたのがこの島留学という制度です。

寮なんかも地方のほうが建てて全人教育をやっていこうということで今やっていますし、外部から来てもらった島留学の生徒さんには、島親さんということで地域の方たちが親代わりみたいな形で、平日は大体寮にいますが、例えば休日だとかに遊びに行かせてもらうとか、夏休みとかそういった期間に交流に行かせてもらってとか、そのような形で地域のほかの学びを持てるような機会をつくっていこう。できればここを第2のふるさとにしてみたいという思いを持ちながら、島親さんになってもらっています。

そういったプロジェクトを当時始めて、それから高校の生徒数自体が急激に増えていって、学級数も増えて、生徒数も増えて、教職員の数も増えて、部活もできるようになってということで、どんどん学校の状況が変わってきて、今4割ぐらい県外から入学ということで、島根県の推薦入試の倍率でいうと、島前高校が県内で倍率が一番高いというような

状況になってきているというところですよ。そういった学習の中で、学生たちの学ぶ意欲だとか、進路に関する女性の意識なんかも変わってきて進学していくような、大学なんかも少しずつ変化が起きているということです。どこの大学に行ったかということとはあまり大切なことではないと思いますけども、それよりも巣立っていった卒業生たちの意識なんかはやっぱり変わってきているかなと感じています。

今日はたまたま卒業生が高知大学の地域協働学部の1年生ということで来てくれていると、ちょっと前に出てきてもらっていいですか。せっかく来てくれていますんで、卒業生どんな感じかという、あと、僕は今いい話ばかりしてましたので、実際高校生で3年間過ごしてどうだったかみたいなのところもちょっと聞いてみたいと思います。

では、明るくしてもらっていいですか。

どうぞ、簡単に1分ぐらいで自己紹介をお願いします。

(古川)

こんにちは。古川森と申します。私の出身は千葉県ですが、14年間過ごした千葉県で、高校入学と同時に今までご紹介があった島根県の隠岐島前高等学校というところで3年間過ごして、そこでいろいろ学んだうえでもっと自分の学びを深めていきたいと思い、今、高知大学の地域協働学部というところに所属しております。

(岩本)

これで多分皆さん思ったのは、何でもともと千葉から島根県まで、そんな流人が流されるような島に流されたのか。そういうことを聞きたいんだと思うので、まず何でもまず島前高校を選んだのか、そこら辺の目的意識とか何かあれば、話してもらえれば。

(古川)

少し後付けになるかもしれないんですけども、まず島前高校というものの場所を与えてくれたのが私の母で、どうせ高校に行くなら面白い学校に行けっていうのを、私が進路で悩んでるときに母が言った言葉だったんですね。

そのときに、母が高校を調べてるときに、「ヒトツナギ」が中止になりましたっていうのがネットの一番下ら辺に出てたらしくて、これ何だろうと思ってクリックしたときに隠岐島前高等学校っていうのが出たらしくて、そこで島留学っていうのがあって、そこでどんどん母が見ていく中で、これは面白いと思ったそうで、それを私に提供してくれたんですけど、私はもちろんそのときには、千葉には友だちも家族もいるし、そこから出る気なんて全くなかったんですね。

そこで千葉県の中の高校をずっと探してたんですけども、どうしてもやっぱり偏差値だけしか変わらなくて、ここから行きたいっていう高校が自分の中にはなかったんで、じゃあやっぱり自分のレベルに合う高校をやるならっていうことになって、そこで目指してたんですけども、そこでじゃあせっかくだからオープンキャンパスに行ってみようかっていうので、ほんとにせっかくだからっていう思いで自分はオープンキャンパスに参加させてもらったんですけども、そこで悠さんの話を聞いたりだとか、その島の自然とか見ている中で、自分の気持ちに少しずつ変化があつて、そのよく分からないもやもやとした気持ちを持って千葉県に帰ったときに、母と一緒に模造紙をああやって、千葉の高校に行くのと島の高校へ行くのどっちが大きいんだろうというのを一夜母と語り合ったんですよ。

それすごく大きかったなと思って、今でも宝物にしている模造紙なんですけども、そこでやったときに、何かすごく自分の未来が見えたのがこの島の高校で、やりたいことができるのと何かワクワクするのどっちだろうと思ったときにすごく大きかったのが島の高校だったので、じゃあその3年間、自分にとって一番大きいものを得られるのってどっちなんだろう、どっちが挑戦できるんだろうと思ったときに、島の高校だなというのがすごく自分の中にあつたので、それでもうこの島に入学することを目標として、受験して来ました。

(岩本)

初めて聞きました。そうだったんですね。じゃあ実際、島前へ来て3年間過ごしてどうでした。こう

いう部分は、自分はすごい良かったな。これはすごいイメージしてたものと違ってすごいギャップだったとか、そこら辺、いい面も悪い面もどんどん感じたままを紹介いただけたら。

(古川)

まず最初に少し悪い面を言おうかなと思うんですけども、さっき寮とか紹介があったと思うんですけども、私はその島の外から来たんですけども、母と一緒に島に移住して、寮に住むんじゃなくて、島の1人の住民としてその3年間を過ごすことを決めたんですけども、その島に留学生として来ているにもかかわらず、その住民としているっていう中で、その島の中の子たちはもともとちっちゃい頃から一緒に積み重ねてきたきずながある中で、そこに1人が入っていくっていったところで、自分に何か距離があるなというのをすごく感じていて、1年間何かとても自分がどっちのポジションにも入れないというところにつらさを感じた1年間だなと思っていて、それこそ何でこんなところに来ちゃったんだろうとか、島流しをされた感がほんとにあって、正直1年終わったときに、帰りたかって母に伝えたこともあったんですけども、でもそのときに、じゃあそこで頑張ろうってちゃんと踏みとどめることができたのはこの環境だからだと思っていて、その学びが学校だけじゃなくて、学校の外にもあるというところで、自分は踏みとどめることができたんだなと思っています。

それは、自分が今まで地域に出て行ってなかったのが、高校1年間でどうしても友だちとかかわることだけに思っていたので、なかなかその島の良さに気づけなかったんですけども、2年になって初めて自分がその島の外のいろんな企業に行ったりとか、あと町長のもとに行ったりだとか、いろんな島の人とのつながりを持つ中で、自分がどんどん開けていく感じがして、初めて自分が将来のことを考え始めたりだとか、目標を持つと明確に決めてみようとか、自分を知るということができた、高校3年間でできたんじゃないかなと思っています。

(岩本)

ちなみに今の話とちょっとつながるかもしれないけど、3年間でこういうのがすごい振り返って変わったなとか、この高校3年間で大きく変わった点とか、何か自分の中でこれは得られたなとか、もしそういったものが何かあれば。

(古川)

すごく変わったなと思うのが、今すごく緊張はしてるんですけども、人前に出ることを楽しむことができるようになったなというのはすごく思います。それは島前高校にいて、いろんな授業でアウトプットをするのがすごくたくさんあったなあと思っていて、自分の考えだとか相手の考えをちゃんと自分の中で吸収して、ちゃんとそれを相手にまた伝え直すっていうのがすごくあったからこそ、人の前に出ること、前に出てみんなに表現したりとか伝えたりすることが、それによっていろんなつながりが増えていったりとか、自分自体がすごく広がっていくっていうことにすごく楽しみを覚えることができました。

(岩本)

なるほどね。ちなみに、ちょっと難しい質問かもしれないけど、3年間その島前で過ごして、島前という地域は吉川さんにとって今どんなものなのというか、島前を出て高知に来てるんだけど、今の吉川さんからすると島前をどういうものに感じるのという、非常にちょっと抽象的な気がしますが、どんな感覚なんですか。千葉でも島前でも学んだ、そして今高知にいる中で、どうなんですか、その3年間学んだ場所っていうのは。

(古川)

まず一つ言えるのは、自分のふるさとかなののを思っていて、自分が生まれたのは千葉県だけでも、なかなか14年間住んできた千葉県をふるさとだって言ってきたことはなくて、それで3年間過ごした海士町をふるさとだって何だか言えるのがすごくあって、そこからちょっと離れるんですけども、じゃあなぜ千葉県のことはふるさとだと言えないん



だろうと思ったときに、それは自分が地域のことを知らないからだなと思っていて、だからもっと千葉県を知っていきたいなという気持ちがまず一つ生まれているなというのがあったりとか、あと、今すごくこの海士町をうらやましく思います。後輩とか、何か自分が卒業してからさらにどんどんこの島がレベルアップして行って、ちょっと自分から遠い存在に思えているところがあるんですけども。

(岩本)

まだ1年も経ってないのに。

(古川)

はい。すごくうらやましいところがあるんですけど、すごく格好いい大人たちがこの島にいて、その人たちのもとでがっちり学ぶことができている後輩たちがすごくうらやましいなと思っていて、だからこそ、自分も、ああいいだけじゃなくて、今この高知大学に来ている目的でもあるんですけども、自分が伝えていくことのできる格好いい大人の1人になって、この島とまたつながりを深めていきたいなっていうのがすごくあります。

(岩本)

これ、最後の部分につながりますが、今後はこんなことを考えているとか、今後の未来のビジョン

とか、もし今思ってるものが何かあれば、どんなものなんですか。

(古川)

私もすごく、今この大学2年生になる一歩手前のところに来て、卒業後をどういう方向性でいくのかっていうのをすごく今迷ってる所なんですけども、ちょっとぼやっと考えているのが、まず1個は、地域っていうキーワードを自分は持って今まで学んできたところがあるんですけども、今この地域っていうキーワードに縛られなくてもいいのかなと思っていて、このキーワードを1回捨てて、まず2学年過ごしてみようかなって思ったりしている部分があるのと、あと、もう1個は、いずれ島に帰って何か恩返しをしたいっていう思いもあったんですけども、帰ってじゃなくて、また自分も例えば高知にいて、島とのつながりがあることによって、その間を何かコネクしていくことができればなっていろいろ考えたりとか、ちょっとぼやっとしてるんですけど、そんなことを考えています。

(岩本)

突然出てきてもらっていろいろ質問してしまいました。ありがとうございます。

ということで、古川さんの場合は、ほかの多くの大体の島留学に来る生徒は寮に入って生活するんで

す。お母さんと一緒に来られてですよ、古川さんは高知に来ただけでも、お母さんはまだ海士町にそのままいて活躍をされてますけれども、ということで、その地元の子たちのコミュニティってのが高校1年生のときにある。県外とかから来て寮に入る子たちは寮でまずかたまりみたいになってくる。そこで、内の人と外の人みたいな溝ができたりとかして、これを3年間でつながっていくみたいなとか、まちづくりによって地元の人とIターンとか融合とか連携協働の仕組みみたいな形で、そういったドラマが起こるんですけども、古川さんの場合、まさにその間に立って、寮のほうでもない、そして地元、かといってそこでもないみたいな形のまさにその間をつなぐような、ちょっと島前でも非常に珍しい、すばらしいポジションを体験していたのかなと思いますけども。

というような話で、いろんな卒業生が出てきてくれます。最後、古川さんが言ってくれた、全員が全員この地域に帰ってきて何かしてほしいということなんかは、心の底で思ってる人たちはたくさんいます。僕も結構そうなんですけども、ただ、それは強要するものでもないし、別に自分のほんといいたい場所でやりたいことをやりながら、でも、何らかの形でこことつながってかわってもらえたりとかすると非常にうれしいなと思いつつやっています。

地元に戻るだけが地域貢献の形でもないですし、いろんなことで活躍してもらおうことで、ほかの地域ともつながっていきますということで、今日、古川さんがいたということが実は今回一番うれしかったことなんです。そういった卒業生なんかもいろんな形でいます。地元の卒業生などの声も、ほんとはぜひ聞いていただきたいなと思います。

こういった高校魅力化の活動をしながら、海士町2,300人ぐらいの人口ですけれども、子どもが増えたりとかしながら、100人ぐらい人口がこの取り組みで増えていたりとか、生まれてくる子どもの数、出生数なんかはこの数年ずっと増えているというような形で、保育園も一つしかないんですけども、この町に、子どもの数が増えたことで保育園も足りないということで、増床増床という形で保育園をどん

どん増やししながら、何とか子どもたちの数に保育園を追いつかせようということやってるといって、そんな状況です。最近はグローバル教育というのを大きくテーマにしなが、地域の中で世界とつながっていくということとかに取り組んでいっています。

最後にまとめですけども、僕らがずっと意識しながらやってきたことを要約すると、何がポイントだったのかというと、今までは学校がどうしても教育を標準化していく中で、やっぱり都市部に出ていった方が、市街地のほうが教育のチャンスがたくさんある。だから、ここにいると不利だ、格差がある、そういう問題意識が非常にあった。じゃあ地域で何をやっていかというと、都会の担い手を育てて、よし都会で頑張ってくいというふうに送り出していたということで、どこかで都市部に貢献しながら、市街地とか都会との差に苦しみながら、何とかこの差を埋めていけないかと、このことを考えながらやっていた。

でも、やってもやっても、その差が埋まらないわけですね。都市部みたいな形の教育なんかできるわけがない。そういう中で若者、子どもたちがどんどん流出していく。そして後継者不足、そして誇りも喪失していく。こういった悪循環の中で、地域が人口減少、少子高齢化になって、若者の流出を促進することに教育も加担をせずとやってきたのがこの100年間ということでした。

このスパイラルを構造自体変えていこうと。どうやって変えていくのか。こういった何かといったときに教育の魅力化、この地域だからこその魅力ある教育をやっていこうと。どこかと同じだとか、都会並みにということだけではなくて、ここだからこそのできるんだというものをやっていく。そして、都会の担い手を育てるのではなくて、ちゃんとこういった地域からでも世界と勝負していける、つながっていける、かわっていける、そういった子どもたちを育てていこう。

そして、こういった場所で子育てをしたい、こういった場所で学びたいというような教育の力を高めていくことで、地方に対する留学だとか教育移住を引き起こしていこうということです。そういったことを通して、意欲のある若者たち、子どもたちが増

えて、誇りを生み出し、地域をさらに元気にしていく。そしてまた、地域の教育力を高めて、学校の教育の魅力化につなげていくと。そんな逆流を引き起こしていこうということで取り組んできたのが、この高校の魅力化という形でやっていますと、やってきましたということです。今こういった動きをこの島前という地域だけでなく、いま島根県全体に広めようと、それを全国の地域なんかとも一緒にやっっていこうというような動きをさせていただいているということです。

大変長くなりましたけども、一旦ここでこちらからの話、事例の紹介を終わりにさせていただきたいと思います。最後までご清聴いただきまして、ほんとにありがとうございました。

(司会)

岩本さん、大変ありがとうございます。予定の時間にまだ少し余裕がありますので、今ここで聞きたいという方いらっしゃいましたら、どなたかお願いします。

(参加者7)

お話ありがとうございました。一つ聞きたいのは、ソニーにおられて、学校に授業で行かれたときにどういう問題意識を感じて、海士町に行かれたのかなというところをもう少しお伺いできればなと思うんですけど。

(岩本)

呼んでもらって出前授業に行ったときは別に問題意識はなく、呼んでもらったから、自分のライフワークとして、呼んでいただいた学校とか大学なんかではワークショップとか出前授業させてもらっていたので、時間の都合がつく範囲で。その一つとして、自分の社会貢献の活動、個人的な活動として行かせてもらいました。ただ、そこで、地域の方たちと夜終わった後に飲みながら、この町の学校はもうつぶれそうだと、どうしたらいいかみたいな、地域の方たちに問題意識を持つてる人がいて、この高校がつぶれたら、この地域は中長期的に見たらほんとにつぶれていくと。何とかしたいんだ、でも、ど

うしていいか分からないんだ。あれ県立高校だから、なかなか手出しができないとか、そういった思いや何かを持つてる人たちがいて、じゃあ、あしたらいいんじゃないか、こうしたらいいんじゃないかというのを飲みながら語っていた中で、あっ、それ面白いね、それこっち来てやってくんないみたいな話になって、それで何を間違えたのか、行くことになってしまったんだけども。

そのときの行った理由というのは、一つはやっぱりその問題意識を持つてる地域の方たちがいた。その思いに非常に共感したとか、こういう人たちとだったら一緒にやりたいと。もしくはこの人たちのために、何か自分が役に立てるんだったらやりたいと、そう思えるような魅力ある大人たちがいたというのが一つです。

僕の問題意識は何だったかという、こういう超人口減少とか、超少子高齢化、高齢化率大体39.8%ぐらいでした。財政難でもありました。これはまさに日本の縮図だなと思ったわけですね。日本全体の高齢化率とか、高知県の高齢化率よりもさらに先を行っている。財政難なんかも、財政状況も非常に悪かった。これは全国のトップランナーだと。ここで起きてるこういった状況が、この先10年後20年後どんどん日本全国で引き起こされていくと。

そうした中で、未来の最前線でいま闘えるチャンスだと。ここで変われば、日本の未来は変わる可能性がある。こういう人口減少、少子化の中、どうやって教育とか人づくりとか、学校から地域の未来を変えていけるんだろうかと。ここで小さいけども、縮図、箱庭みたいところで新しいシステムだとか取り組みのモデルを生み出すことで、これから日本の多くの地域が直面していく課題に対する一つの希望だとか、新しいソリューションをここで生み出すことで、日本全体の未来に貢献できるんじゃないかというような、そういう問題意識を持つて、それで10年前に行って取り組みをさせてもらいながら、だんだんその原型みたいなものができてきて、じゃあ次はそれをスケールアウトしながら、どうそれを全体のシステムにつなげていくのかと。

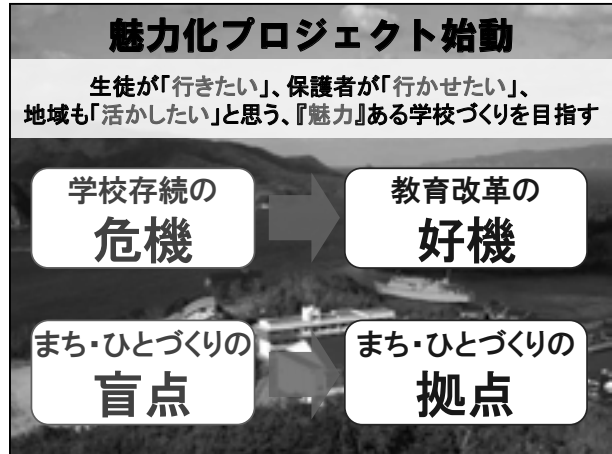
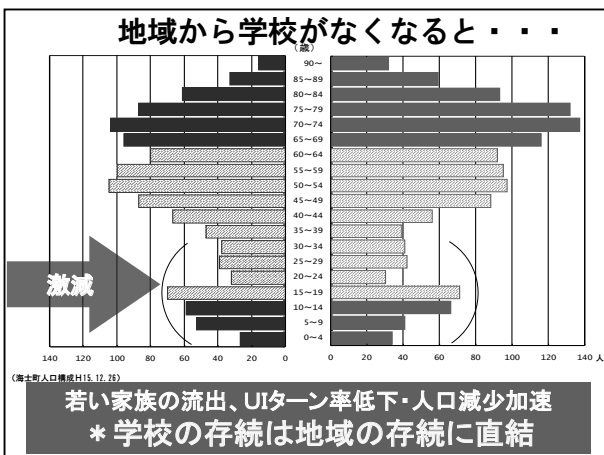
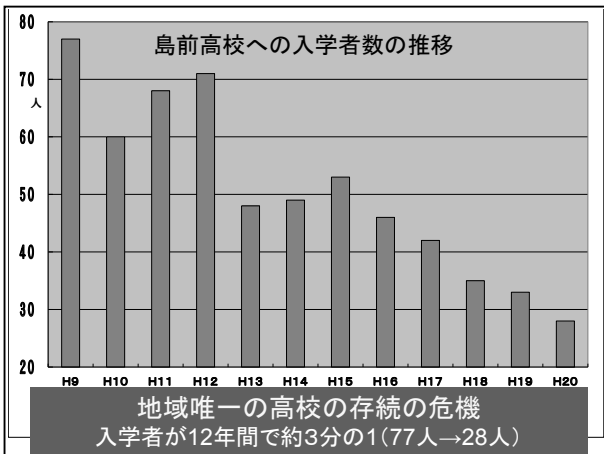
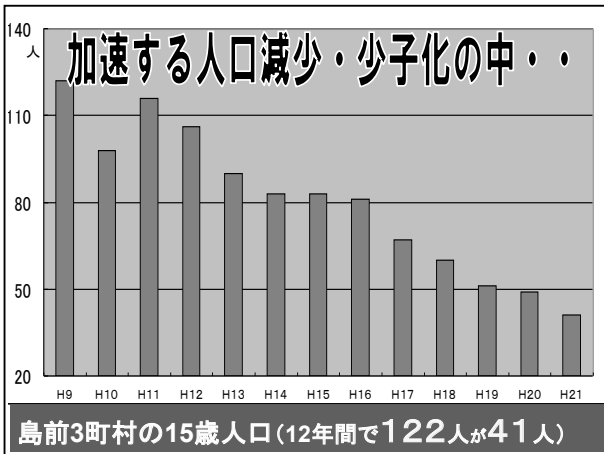
あそこだからできたんでしょとか、あの人がいた

からできたんでしょとか、島だからできたんでしょとか、いろんな言い訳ができるわけですね、言い訳したい人は。そうじゃないんだという形で、それを僕がいなくても回ってるとか、これ離島じゃなくてもできてますよとか、もしくは何かシステムとしてそういうものが動いているんだというようなものをちゃんとつくる中で、大きなシステムチェンジにつなげていくというのが今の僕の問題意識のベースとして、それで今島根県という立場でさせてもらっているというところです。

(司会)

それでは、大体予定の時間になりましたので、一旦ここで休憩を挟んで、2時50分から再開をしたいと思います。その間に質問があれば書いていただいて、質問票は回収いたします。それでは、一旦ここで休憩にさせていただきます。





教職員数の不足と多忙・負担感 (課題)

(当時の島前高校の状況)

- 学級減(H17-20)で教員約4割が削減(19人→12人)
- 実習助手、図書館司書も消え、図書館には鍵
- 教員が専門以外の科目も教えており、進学に不利
- 物理が履修できず、理系進学はできない
- 少人数で大規模校と同じ分掌をこなし更に多忙

教育力の維持も困難
「学校だけで今以上に何かやるのは無理」

地域との協働による推進母体と共通ビジョンづくり

隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会(魅力化の会)

役員	島前3町村の 町村長、議長、教育長、総務課長、3中学校校長、高校校長、PTA会長、OB/OG会長等
指標(KPI)	1.島前地域内からの入学率増 2.島前地域外からの入学数増

学校と地域の協働でビジョンを策定
地域を巻き込んだ推進体制の構築へ
コーディネーターを校内に配置



教育資源

超人口減少
超少子高齢化
人・物・金がない

重要課題の宝庫
未来への最前線

課題解決学習には最適な環境
ここでの学びは日本の未来を切り拓く力となる

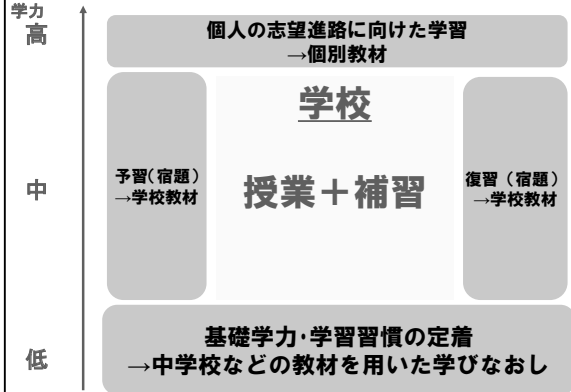
学校と地域社会を結びつける知行合一の学び

総合学習、各教科や部活動、生徒会、学校行事、
土曜日、祭、公立塾等も活用



国際交流スタッフやICTを活用した世界とつながる学び。

学校と放課後・土曜学習支援(寺子屋・公立塾等)の協働例



地域の子ども・若者の傾向

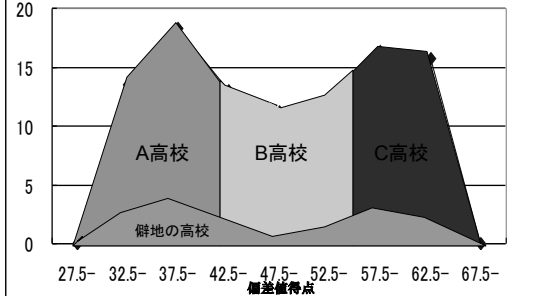
課題

関係性の固定化
価値観の同質化
刺激や競争の欠如

多文化協働力の不足
広い視野・創造性の不足
チャレンジ精神の不足

僻地の高校の特徴(イメージ)

課題



僻地の学校は幅広い学力や進路への対応が必要
しかし、教員数も少なく、民間教育もなく不能。
経済力が豊かな家庭の子もほど市街地へ

未来を創る島留学

全国から意志ある脱藩生を募集
地域志向や意欲・能力の高い多彩な生徒を対象
「異文化・多様性」を持ち込み活性化

21世紀型寺子屋(公民家?)
学校地域協働型公立塾「隠岐國学習センター」

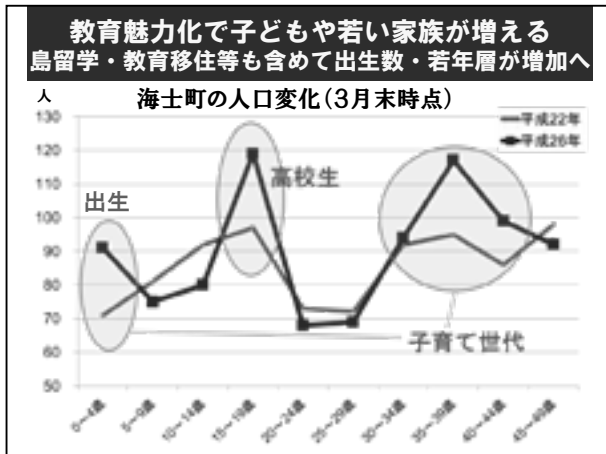
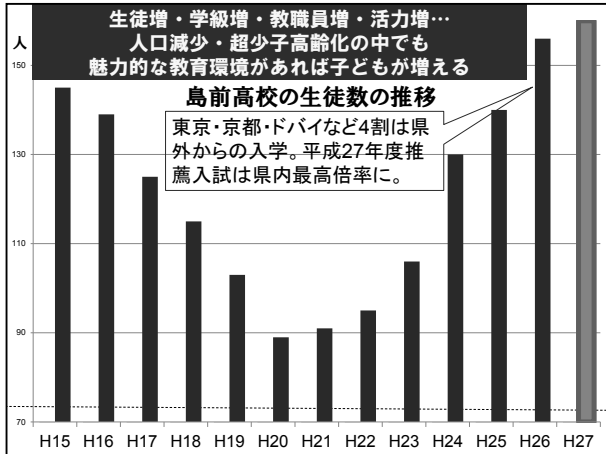


自立学習・プロジェクト学習で学校との相乗効果創出

寮を活用した全人教育

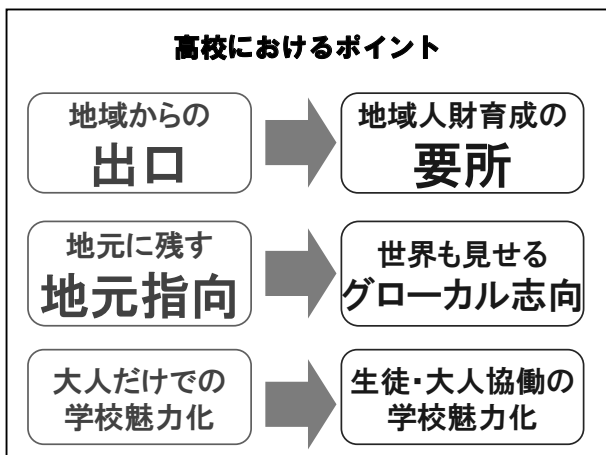
島家の創設⇒交流と暮らしからの学び場・教育寮
島親の活用⇒子どもと地域をつなぐ・住民の教育参画を促す





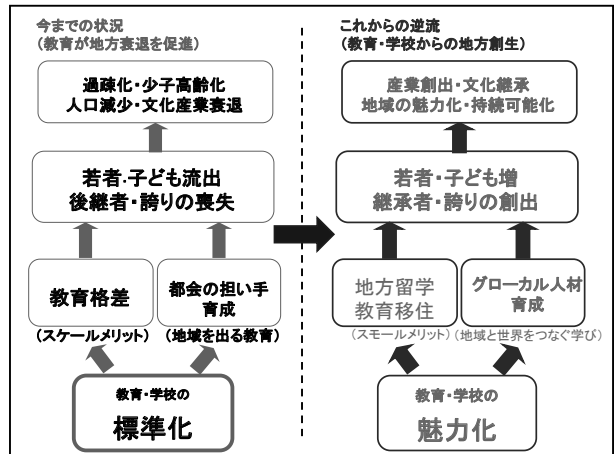
島根大学に地域教育魅力化センター設置

今春より教育魅力化のリーダー養成コース開講

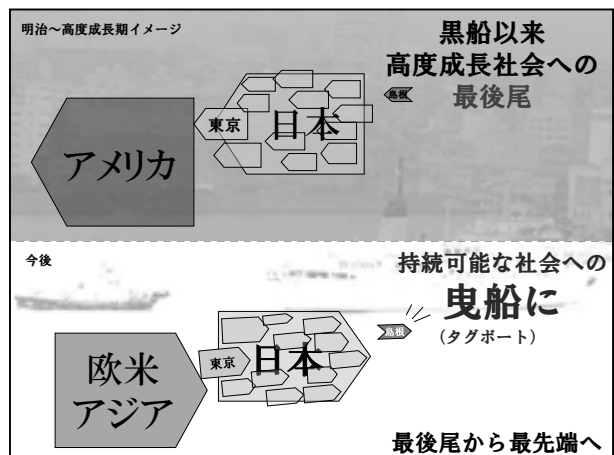


教育魅力化とは？

- ① 魅力ある人づくり**
 - ◆ 21世紀型能力育成への課題解決型学習
 - ◆ 自分と地域と世界をつなぐグローバル人材の育成
- ② 魅力ある学校づくり**
 - ◆ 地域と協働した魅力ある学校づくり
 - *AL、総合学習、地域系部活、生徒会、ICT、寺子屋・公立塾、寮など
- ③ 魅力ある地域づくり**
 - ◆ 住民総活躍に向けた子ども・生徒参画型地域づくり
 - ◆ 「地方留学」及び「教育移住」(子育て世代のUISターン)



高度成長社会	持続可能社会
経済成長(GNP)・物の豊かさ	幸福度(GNH)・暮らしの豊かさ
ファースト・早い安い便利	スロー・安心安全健康
大量生産・大量消費・規格品・使い捨て・フリートレード	少量多品種・高付加価値・4R・循環型・フェアトレード
グローバル・ビッグビジネス	ソーシャル・コミュニティビジネス
古きを壊し、新しきを造る Scrap & Build	古きを活かし、新しきに紡ぐ 温故維新, Renovation
競争・占有・対立・勝ち負け	共創・共有・協働・三方よし
一極集中・中央集権型	自律分散・ネットワーク型
↓	↑
地方の過疎化・ 疲弊化・画一化	教育・地域の 魅力化・多様化

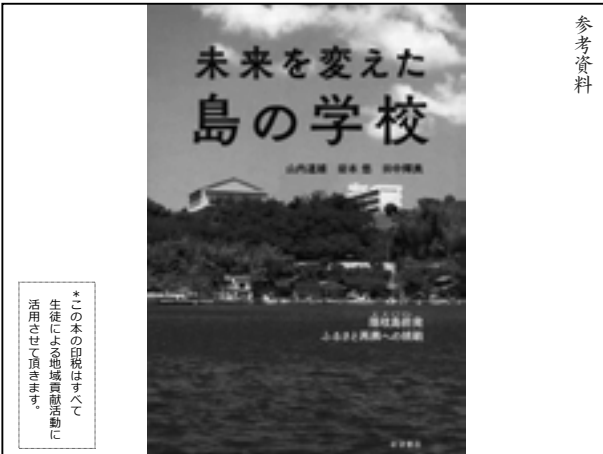
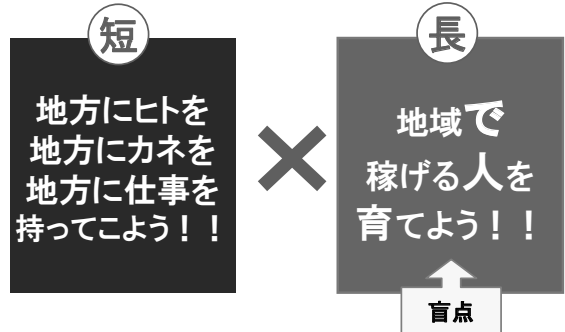


岩本 悠 氏
(いわもと ゆう)



島根県 教育魅力化特命官
 ・東京都生まれ。学生時代にアジア・アフリカ20ヶ国の地域開発の現場を巡り、その体験学習記『流学日記(文芸社/幻冬舎)』を出版。印税等でアフガニスタンに学校を建設。
 ・幼・小・中・高校の教員免許を取得し卒業後は、ソニーで人材育成・組織開発・社会貢献事業等に従事する傍ら、学校・大学における開発教育・キャリア教育に取り組む。
 ・2007年より海士町で隠岐島前高校を中心とする人づくりによるまちづくりを実践。「日本を立て直す100人(朝日新聞出版・AERA)」に選出。プロジェクトは第一回プラチナ大賞(総務大臣賞)等を受賞。
 ・2015年から島根県教育庁と島根県地域振興部を兼務し、教育開発による地域創生に従事。
 <近著>『未来を変えた島の学校 隠岐島前発する子どもたちの挑戦』(仕事・経済書房/2016)

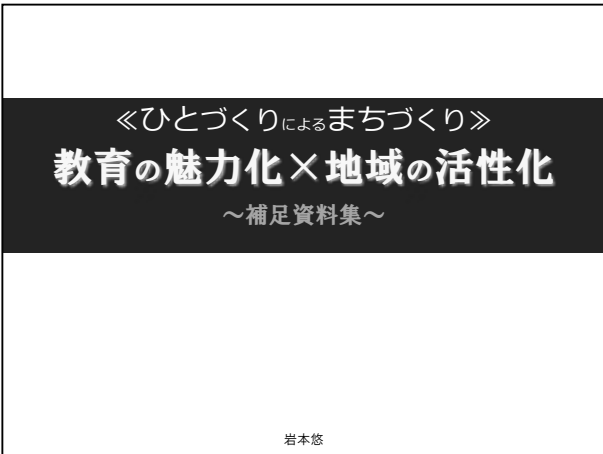
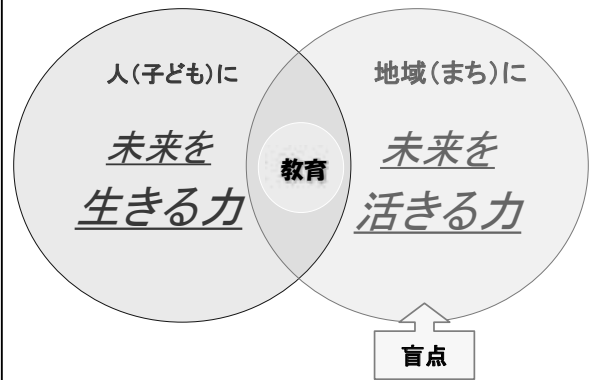
**20～40年後を本気で見据えた
持続可能な地方創生**



参考資料

*この本の印税はすべて生徒による地域貢献活動に活用させていただきます。

地方で求められる持続可能な教育とは？



岩本悠

地域の人づくりニーズ

- 地域の課題(悪循環)
既存産業衰退、若者流出、後継者不足、公共依存
(少子高齢化、文化・行事の衰退、財政難)
- 地域の向かう指針
産業創出、若者定住、継承者育成、自立協働
- 求められている人材

**地域で継業・生業・事業を創り出せる人材
《地域起業家的精神xグローバルマインド》**

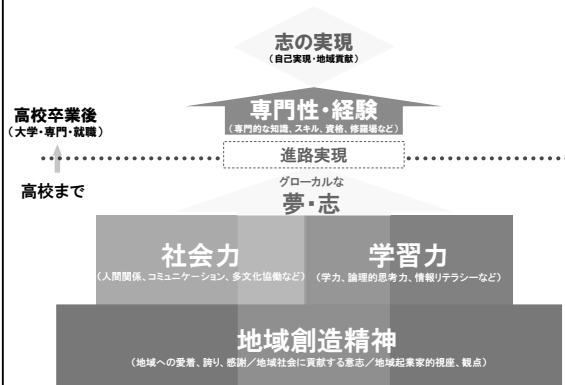
人材自給率アップ

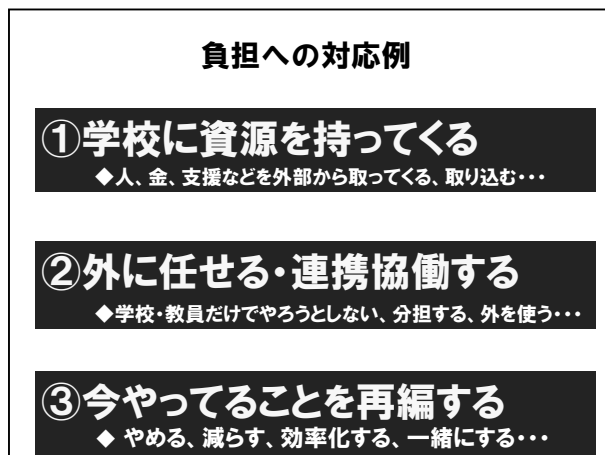
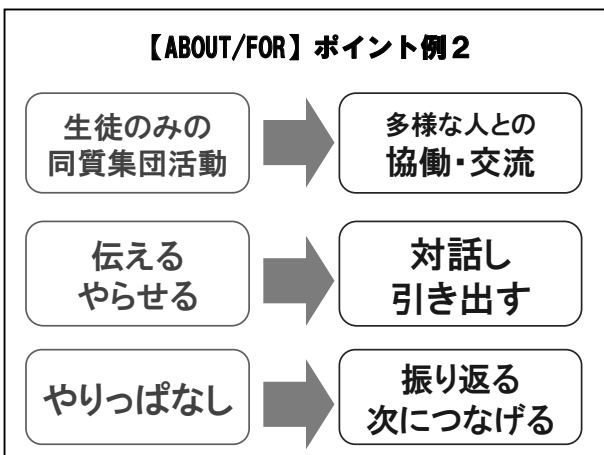
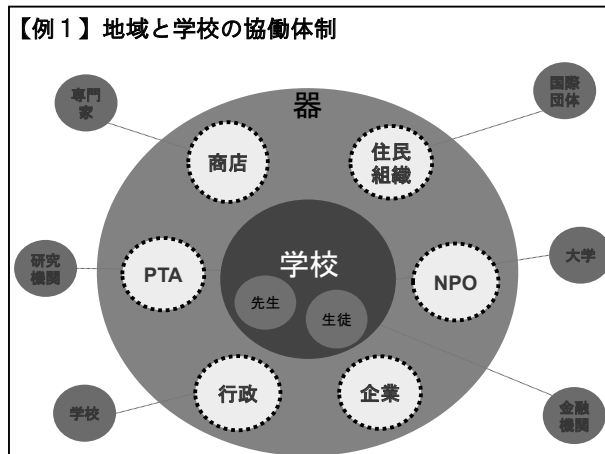
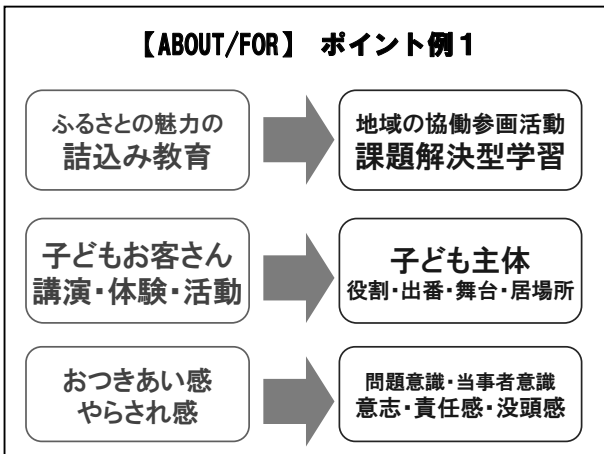
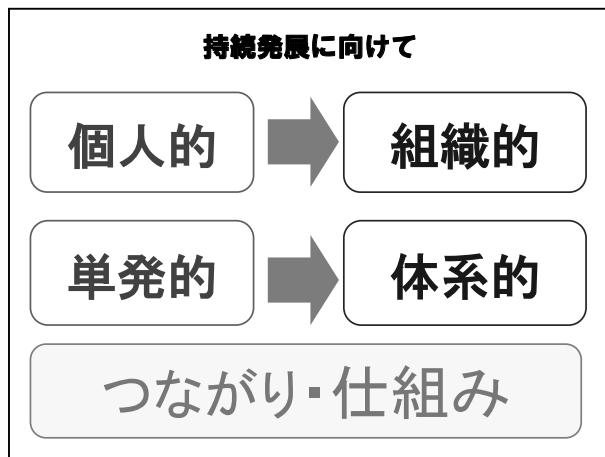
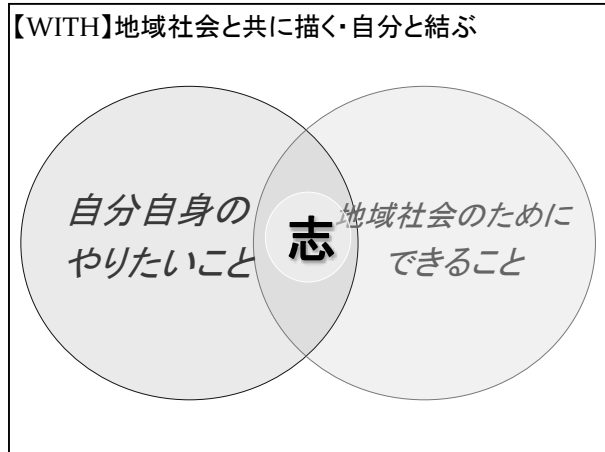
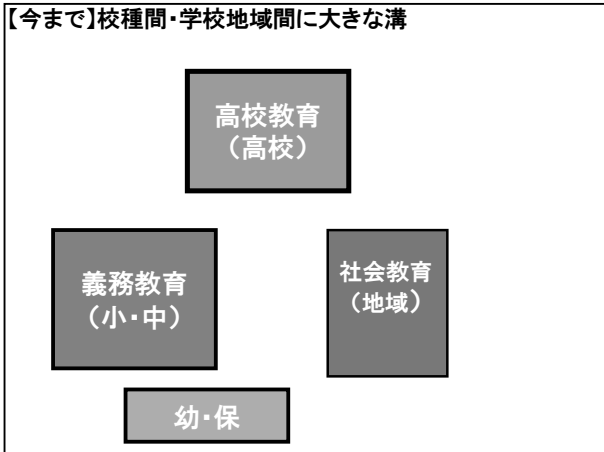
「仕事がないから帰れない」 ⇒ 「仕事をつくりに戻りたい」
20世紀のふるさと観 21世紀のふるさと観
「志を果たして帰る」 ⇒ 「志を果たしに還る」

①

「地方創生」の盲点
地域の未来をつくる人づくり

【教育ビジョン】高校卒業までに育てたい資質・能力





②

学校統廃合への代案

SSS・SMS

平成27年1月 文科省は60年ぶりに
学校統廃合の検討指針を改定

- 6学級以下の小学校、3学級以下の中学校は統廃合の適否を「速やかに検討する必要がある」
- 通学範囲の基準「4～6キロ以内」（徒歩）⇒
⇒「おおむね1時間以内」（スクールバス等）
- 統廃合等を進める際の補助や教職員加配など

『公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引』

高校も・・・

- 30の道府県が、高校教育において「重点的に取り組んでいる課題」として「再編・統合」を挙げる
- 公立高校の約7校に1校は今後10年以内に統廃合の可能性 ⇒現在3628校（毎年約50校が消滅）
- 今後さらなる人口減少、少子化、財政難で地方の公立小規模校の統廃合は促進

文部科学省 平成23年度 高等学校教育の改革に関する推進状況
文部科学省 平成16～26年度 学校基本調査

学校の有無が人口増減へ与える影響（参考）
離島における施設の有無による人口増減率の差

● 病院・診療所の有無と人口変動

	1991年人口	2010年人口	人口増減率	差
なし	12,865	7,849	-39.0%	-0.2%
1軒	86,824	53,152	-38.8%	

● 高校の有無と人口変動

	1991年人口	2010年人口	人口増減率	差
なし	114,029	69,319	-39.2%	-10.9%
1校	86,299	61,885	-28.3%	

● 小学校の有無と人口変動

	1991年人口	2010年人口	人口増減率	差
なし	12,118	6,305	-48.0%	-12.0%
1校	130,007	83,168	-36.0%	

「平成25年度新しい離島振興施策に関する調査業務報告書」
(国土交通省国土政策局離島振興課)より

中山間地においても学校までの距離が
定住人口に大きな影響を与えている（参考）

● 中山間地域の定住人口維持要件（判別分析結果）

変数	係数	標準化係数	有意性
1 中山間地域有無	-1.3015	0.713	**
2 人口100人以上	0.0074	0.236	**
3 交通手段の整備	0.1394	0.176	**
4 中山間地域有無	0.0016	0.005	0.9445
5 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445
6 中山間地域有無	-0.0179	-0.007	0.9445
7 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445
8 中山間地域有無	0.0004	0.001	0.9445
9 中山間地域有無	-0.0412	-0.015	0.9445
10 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445

● 中山間集落の消滅要因（判別分析結果）

変数	係数	標準化係数	有意性
1 中山間地域有無	0.1394	0.176	**
2 交通手段の整備	0.0016	0.005	0.9445
3 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445
4 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445
5 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445
6 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445
7 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445
8 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445
9 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445
10 中山間地域有無	0.0001	0.000	0.9445

「中山間地域の活性化要件」
農林統計協会 橋詰登2003より

1つの選択肢(Super Magnet School)
全国・海外からも生徒が集まる魅力ある学校づくり



地域の特色と魅力を学校に活用した
オンラインワンの教育環境の創出

もう一つの選択肢

魅力ある教育環境づくりに向けた再編成
魅力ある学校再編成

- 数合わせのための「消極的・守り」の統廃合ではなく、魅力ある教育環境づくりに向けた「能動的・攻め」の再編
- 結論ありきの「協議」ではなく、子ども、地域、行政（財政等）の「三方良し」の結論を生み出すための創造的な対話の過程をデザイン
- 再編成の計画や結論を出すことを目標とせず、その後の行動や参画を見据えて、関係者・当事者間の信頼関係構築と深い本音の対話を重視

更なる選択肢

人口減少時代を乗り越える小さな学校
スーパースモールスクール(SSS)

- 今までの学校の「標準規模」を覆す小さくてもキラリと輝く学校づくり
- ‘Small is beautiful’の視点に立ち、大量生産型の人づくりモデルから少量多品種高付加価値の人づくりへの転換
- コーディネーターを配置、地域資源とICTを活用、他校種ともつなぐ

3 パネルディスカッション

パネラー 岩本 悠 氏
高石 清賢 氏 (嶺北高校振興会会長)
岡村 凌兵 氏 (嶺北高校3年生)
敷地 那奈美 氏 (窪川高校1年生)

コーディネーター 畦地 和也 氏
(黒潮町教育次長・高知県自治研究センター理事)



(司会)

それでは、第2部のパネルディスカッションに移りたいと思います。

実は、今回のこの企画をするにあたりまして、県の教育委員会の高校教育課にご相談に行きました。そこで、海士町の岩本さんと呼んでやりたいんだと相談をしましたところ、「それなら、高知県の高校でもそういうことをやっているところたくさんありますよ」ということを言われてびっくりした次第でした。そういったことなら、ぜひ高知における高校生の取り組みなんかも合わせて発表していただいて、海士町での取り組み、そして高知における取り組み、そういった事例も発表していただきながら、我々自身学んでいこうということで、この第2部のパネルディスカッションの企画をさせていただきました。

パネラーとして、前にご登壇していただいている皆様のご紹介をさせていただきます。正面左から、先ほどお話しいただきました岩本悠さんに引き続きパネラーとしてご登壇をいただきます。よろしくお願いいたします。

(岩本)

よろしくお願いいたします。

(司会)

そしてそのお隣、高石清賢さんです。嶺北高校振興会の会長さんです。よろしくお願いいたします。

(高石)

高石です。よろしくお願いいたします。

(司会)

そして今回、特にこの取り組みが大変特徴的というか、先進的だということで紹介いただいた嶺北高校と窪川高校から、生徒さん一人ずつご登壇をしていただきました。まず、嶺北高校からは岡村凌兵さんです。

(岡村)

どうぞよろしくお願いいたします。

(司会)

そして、窪川高校からは敷地那奈美さんです。

(岡村)

よろしくお願いいたします。

(司会)

どうぞよろしくお願いいたします。

そしてコーディネーターですけども、黒潮町教育次長で当センターの理事でもあります畦地和也さんをお願いしてございます。よろしくお願いいたします。

(畦地)

どうぞよろしくお願いいたします。



(司会)

それでは、以後の進行はコーディネーターの畦地さんにお任せしたいと思います。よろしくお願いいたします。



(畦地)

皆様、こんにちは。黒潮町の畦地と申します。当センターの理事をしています関係で、今日進行をさせていただきますけれども、先ほど紹介いただきましたように、私、地元の役場の職員で、たまたま今教育委員会にいますので、教育というのは非常に基本的にも関心がありますし、それから地元の方高校、10年前に商業高校から県の再編で単位制の普通高校になりましたけれども、その大方高校のコミュニティスクールの座長をしているというように、高校が地域にどのように力を発揮していくのか、それがどのようにその地域に影響を与えていくのかというのを大方高校の事例を見ながらいろいろなことを感じていますし、今日お話しいただきました岩本さん、実は大方高校にも視察に来られたということで、私も隠岐のほうから来られるということは校長先生にお聞きをして、ぜひ同席していただだけませんかって言われたんですけど

も、業務と重なって会えなくてニアミス状態だったんですけども、今回初めてお会いをしました。

その後、いろんなマスコミで隠岐島前高校の取り組みというのは、今全国に影響を与えていますね。高校魅力化という言葉が先ほど出ましたけれども、多分この高校魅力化プロジェクトというキーワードはこの隠岐から出たのではないかと思います。

今北海道からいろんなところで学校の再編に合わせて、今までの高校がなくなるというときには、地域というのは残せということしかやらなかったんですよ。とにかく「残せ、残せ」、県教委あるいは県議会に「残せ」。ところが、ここ数年は、残すためには我々何をすればいいのかと。地域に住む我々は何をすべきなのかというのを一生懸命考える地域が出てきて、そういう地域が高校魅力化ということに一生懸命いま取り組んでいる。中には、もう県立高校じゃ駄目だから、市町村で引き取って市町村立の高校にするという自治体も出てきました。

そういう中で、我々高知県も高校の再編、29年度から新たな再編で計画がスタートしますけれども、またさらに10年後には再編計画が出るでしょう。そうしますと、我々も今うちの町長にも言うてくれるんですけども、10年後、大方高校どうなるかわかりませんよと。ほんとに地域が頑張っって、高校を核にしてどうやって地域づくりをしていくかとい

うことを真剣に考えなければ、大方高校は残らないのではないかということを言っています。

多分高知市以外にある県立高校は、同じような状況になるでしょう。そのときに私たちは何をしなければならぬのかというのを、今日一生懸命皆さんと一緒に考えていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

実はこの4名の方とは、3時間ほど前に初めてお会いしました。なので、打ち合わせはしましたが、全くだうしようかってまともじゃなくて、ほんとに行き当たりばったりになるかもしれませんけれども、皆さんに助けていただきながら進めていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。まずは、それぞれの参加をしていただいている方に自己紹介をしていただきたいと思います。

岩本さんは先ほどお話ししていただきましたので、手前の嶺北高校の振興会会長の高石さんから、自己紹介をしていただけますか。



(高石)

嶺北高校の振興会会長をしています、また、嶺北高校の「プロジェクト41」という組織の代表をしています高石と申します。実は岩本さんとは3年ほど前に海士町に視察に行ったときにお会いして、いろいろお話を聞かせていただいたり、一緒に飲ませていただきました。そのときに岩本さんとか大江課長の話とか聞くと、やってることがすごいので、やっぱり話聞くとへこんでしまいました。けど、やっぱりその後、帰って考えると、ああうちも頑張らないかなということも闘志がわいてきて、また頑張っているところなんですけど、このプロジェクト41のレポートも島前高校と一緒に、平成21年に生徒数が41名を下回りまして、ちょうど再編計画の途中だったので、こら何とかせないかなということで、41名というキーワードにして、プロジェクト41という組織を学校、PTA、行政、議会、地域の方々に集まっていただいて立ち上げました。その後41名を超えた年もありましたけど、また減少に転じるといった状況でございますので、

今は嶺北高校の魅力化と健全な存続に向けて取り組んでいるところです。今日はよろしくお願いいたします。

(畦地)

続いて、嶺北高校3年生の岡村さん、お願いします。

(岡村)



嶺北高校3年の岡村凌兵と申します。高校は一応卒業をしてしまったんですけども、今まで3年間嶺北高校ではたくさんことをやってきました。高知県でも数少ない学校だということで取り組みが認められたということは、大変うれしく思います。今日は、そんないろんな活動がある中で、高知県の地域に学校がどうかかわっていったらいいのかということを、高校生目線で話ができたらいいなと考えています。今日はよろしくお願いいたします。

(畦地)

続いて、窪川高校の敷地さん、お願いします。



(敷地)

私は窪川高校1年の敷地那奈美といいます。まだ高校生になって1年しか経ってないんですが、私の通っている窪川高校の取り組みや、私自身が1年間やってきた取り組み、それを将来の夢なんかと合わせてお話したいと思っております。よろしくお願いいたします。

(畦地)

ありがとうございます。いずれの高校も特徴的な取り組みをしているということで、県教委から紹介をされたということでございます。そこで、お二人の高校生にそれぞれの高校で、特に高校と地域、あるいは高校生と地域、そういう両者間でどういう取り組みをされているのかというのを、それぞれ嶺

北高校、窪川高校の事例をご紹介していただきたい
と思います。まず岡村君から、地域とのいろんな取
り組みについてお話ししてください。

(岡村)

嶺北高校には、主に五つぐらい自主活動組織とい
うのがあります。まず、地域ぐるみで商品開発をし
ていく「レイホクユースネイバース」という地域、
これから来る南海地震に備えて防災を高校生主体で
やっていくという「レイホクガーディアンエンジェ
ルス」という自主防災組織、それから環境のことに
ついて考えていく、嶺北地域は特に山の多い地域で
すので普段から山とか川とかに触れられる環境で、
高校生が環境について何をしていったらいいのかと
いうのを考える「レイホクエコフリーゲルス」、
それから去年度かな、高知東警察署さんができたこ
とでそちらと連携をとらせてもらって、また去年、
高知県のほうに嶺北高校の学生が描いたポスターが
配布されたそうで、「レイホクフリーゲルス」と
いって、そういった自主防犯組織などを立ち上げて
活動を行っています。また、嶺北地域は歴史も深い
地域で、例えば本山氏と長宗我部氏の戦いなんかは
とても有名ではないでしょうか。そういった戦いと
か歴史について探っていく「歴史探究」のこの五つ
のグループに分かれて、主に活動しています。

私は、高校時代、よく「レイホクフリーゲルス」と「レイホクガーディアンエンジェルス」のほうに所属をして活動していたんですが、「レイホクフリーゲルス」は生徒会執行部が主となって活動していました。嶺北地域などはお年寄りの方が多いので、最近ニュースでもよく聞くと思いますが、振り込め詐欺とか、そういった詐欺の事例などがものすごく頻繁に出てきています。そういったことを予防するには、やっぱり警察の方の努力も大事ですが、普段から地域に触れられる高校生から呼びかけをすることで、そういうことを防止できるのではないかと思います、「フリーゲルス」のほうでポスター配布、それから学校の前に、交通安全を呼びかけるために週1回看板を出して立って啓発をするというようなこともやっています。

また、RGA（レイホクガーディアンエンジェル

ス）では、市内こちら辺は津波が来るということ
で、そっちの対策も大事だと思いますが、山間部は
山津波といって、山が崩れることによって川が氾濫
して大規模な災害が出るといったようなことも懸念
されています。そういったことを高校生が主体と
なって活動に取り組んでいこうじゃないかというこ
とで、去年の9月1日ですけれども、高校生を対象
として防災講演もやらせていただきました。その際
には、クロスロードクイズといって、「あなたなら
どちらにしますか」ってイエスとノーの形式に分か
れて、なぜそうなるのかを考えるとといったような形
式で、一人ひとりが防災に関する知識を深めてもら
おうという、そういった活動もやっています。

嶺北高校は、そういったように高校生が主体と
なって活動していく学校です。また、地域の方も普
段からそういった活動に触れていただくことによ
って、活動の取り組みはものすごくしやすくなって
います。高校生のする活動に地域の方が当たり前
に触れてくれる、それから協力をしてくれるといっ
たようなところが嶺北高校の魅力だと、私は考えて
います。

(畦地)

ありがとうございます。岡村さん、ちょっと聞
きたいと思いますが、商品開発って例えばどんなも
のがありましたか。

(岡村)

商品開発は、「れいほく未来」という企業がある
んですが、そちらの方と連携をして、チヂミって韓
国料理があるんですけど、嶺北はすごいお米が有名
で、例えば「土佐天空の郷」とか、全国で1位を
取ったお米なんですけれども、そちらの米粉がとて
も有名で、米粉を使ってそのチヂミを作る粉を一
緒に商品開発したりとか、実際に地域の方向けとい
うか、全国に向けてもう販売も展開されている商品
です。

また、あとはマドレーヌとかお菓子がメインなん
ですが、嶺北特産のもの、例えば「れいほく八菜」
といってとても野菜も有名なんですけれども、その
野菜を使ったお菓子作りをしてみようじゃないかと

ということで、特産品を使った高校生主体の商品の開発をしています。

(畦地)

チヂミ粉の商品名は何ですか。

(岡村)

確か「チヂミ粉」ってでかでかと書いてあって、赤いパッケージです。

(畦地)

だそうですので、見かけた際には、ぜひご購入のほどをよろしくお願いします。

続いて、敷地さん、窪川高校の取り組みをお願いします。

(敷地)

私たちの窪川高校でやっていることは、まず主に生徒会主催で清掃活動、地域の窪川のまちを歩いて、ボランティアとしてごみを拾っていく。あとは、2年生になったら、農業コース、商業コース、大学進学コースに分かれるんですけど、その中の農業コースの2・3年生が作ったシクラメンとかメロンなどの花や果物の販売を地域の方にしています。窪川の緑林公園というところでやる「米こめフェスタ」という、「食の祭典」って呼ばれるのがあるんですけど、それに出品して買ってもらったり、あとは3年生の地域課題研究で、介護のボランティアに行ったり、防災の訓練に参加したり、商品開発で今年はライスバーガーを作っていたと思うんですが、それを窪川の有名な仁井田米とかショウガとかを使った商品を作って、私も「米こめフェスタ」とかに出品する活動や、あとは私個人でもあるんですが防犯ポスターを制作、警察の方から依頼を受けて、自転車の盗難防止を呼びかけるポスターを描いて、駅の駐輪場に貼ってもらったり、あとは四万十町にはよさこい踊り子隊「四万夢多」というチームがあります。それに窪川高校は高校生が7人ぐらいで、また先生も校長先生を合わせて2人参加してもらってるんですけど、その「四万夢多」は町内のイベントにも出るし、本祭にも出るし、窪川高校だったら

文化祭や文化発表会にも来てくれて、地域の方と交流が深くあると思います。

あとは、開かれた学校づくりでPTA、小・中学校、役場、農協、卒業生の同窓会とかがかかわって、生徒会が行った活動を報告し、地域の方、役場の方などから、またこれはこうしたらいいんじゃないかとかいう意見を聞く、より良い学校をつくろうという機会にもまいます。以上です。

(畦地)

ありがとうございます。ライスバーガーはどこで買えますか。

(敷地)

ライスバーガーは普通には売ってないです。すみません。

(畦地)

「米こめフェスタ」に行けば買えるんです。

(敷地)

今年は買えました。また、来年は、新しい3年生が違う商品を開発して売ると思います。

(畦地)

9月ぐらいですかね。いつだっけ。

(敷地)

「米こめフェスタ」は11月です。

(畦地)

11月ですかね。11月の開催だそうですけど、きれいな緑林公園とかですね、高校の下。

(敷地)

高校のある下です。

(畦地)

ぜひ皆さんも高校生が売っていると思いますので、新しい商品を買ってみてください。

それでは、高校生からは、高校生たちが地域とい

ろんな連携をしながらの活動について、ご紹介をしていただきました。

続きまして、高石さんには、地域の住民側として取り組まれてることについて、ご紹介をお願いします。

(高石)

先ほど言いました「プロジェクト41」という組織を平成21年に立ち上げました。この組織というのは、何かをこの組織でやろうという組織ではなくて、今言ったような学校、PTA、行政、議会、地域、そういった方々の嶺北高校の活性化に協力したいという方々に集まっていたいて、これからどういう方向でみんなやっていこうかというようなことを話をしました。島前高校の視察も行ってきました。そして、まねできるところは随分とまねもさせてもらいました。できないこともありましたけど、パクれるものはどんどんパクろうというような思いでやりました。

「プロジェクト41」というネーミングは、先ほど岩本さんも言っていましたように、隠岐人とか島親とか島留学とか、そういうネーミングってすごく大事やなあと、何かこうみんなが共感してくれるような名前やないとなかなか方向性ってできないなということで、キーワードもその生徒数の41というキーワードでして、そのころ「プロジェクトX」という番組があったので、よしこれを引っ付けて「プロジェクト41」という名前にしようということで考えたところ、割とこの名前結構広まっていろんな方に覚えてもらいました。この組織で年間4回ぐらいずっといろいろな取り組みもしながら、どういうことができるのかということ話を話合ってきました。

それで3年目にそれをまとめたものを、「10年後の嶺北高校をめざして」という提言書にまとめました。先ほど言いましたように、「プロジェクト41」って何かをできるとかそういう組織ではないので、任意の組織でするので、それぞれの今ある組織で何ができるのかということで、この中には各組織ごとに書いてあります。提言書の中に、この件に関しては行政担当ですよ、これは学校ですよということで、今ある組織にやってもらうということで提言

書はまとめてあります。提言書のキーワードとしては、嶺北高校の存続が地域振興のかなめだと。嶺北高校の健全な存続が地域振興のかなめにこれらになっていくんですよということで、提言書には示してあります。

その中で、各組織にはいろんなことで動いてもらってるんですけど、なかなかその組織ごとに動けないところもあります。組織が学校の中に入ってくるということもなかなか厳しいところもあるので、一つ提案してやってもらったのが、社会福祉協議会(社協)に学校に来て、いろんな子どもたちの活動のコーディネートをしてもらいたいということで学校に入ってきてもらいました。最初は小学校統合のときに小学校に入ってもらって、中学校に入ってもらって、その後、なかなか高校というところは入ってこれないところもあったんですけど、もう入ってくださいと、嶺北高校に入ってやっぱり小・中学校と同じように子どもたちを地域に出してくださいということで、社協にお願いしました。社協も今入ってきていただいております。随分と高校の中で活躍してもらっています。

あと、私も「プロジェクト41」の代表をしてるんですけど、なかなか動けないことがある。会もしたりして、いろいろ話はするんですけど、じゃあこの後に何を移すのかということ動けないところがあるので、何とかこの岩本さんのような人が欲しいという思いをずっと持っていました。

そういうことで、その方をということで「プロジェクト41」のほうでもいろいろしてたんですけども、今年、土佐町の地域総合戦略会議で取り上げてもらって、今1名名前が、これもパクってしまったんですけど、嶺北高校教育魅力化特命官という名前で1名、嶺北高校のことでほんとに動いてもらえる方を地域協力隊として土佐町で職員採用していただきました。動き出したところです。そういうことで、地域としても嶺北高校の魅力化、10年後に健全に存続しているように何とかしていこうということで、地域で応援しているところです。

その提言書の中でも、やっぱり宿舎とか寮とかいうこともありました。ただ、外から人が来ると、まず嶺北高校のいい状況が壊れてしまうんじゃないか

と、そういう心配もありました。寮を建てるというハードルもすごく高かったです。そういうことでなかなか進めなかったです。地域受け入れということも誰が責任を持つんだとかいうようなことで進めなかったんですけど、いま古川さんが話してくれたように、外からの人が入るとすごく高校は変わっていくと思うんです。

実はこの岡村君も小学校の間は市内のほうの小学校に行かれてて、中学校から嶺北中へ、そしてそこで嶺北地域の良さ、嶺北高校の良さを見て、嶺北高校へ迷いもなく入っていただいて、そして高校のリーダーとして活躍してくれました。やっぱり少し二の足を踏んでいた地域外からの生徒の受け入れというようなことも、これからやっぱり進めていかないといけないんだなと。やっぱり外から来た人によって嶺北高校もこれから良くなっていくんじゃないかなと、そんなふうにも考えております。ただ、なかなか受け入れ態勢できていないので、これからまたそういうことも地域でやっていかないかなと、そんなふうに考えてるところです。以上です。

(畦地)

ありがとうございます。お三方からは、それぞれの学校ないしは地域からの取り組みについてご説明をしていただきました。

岩本さんにも自己紹介ではないですけども、質問があります。まず一つ目です。島前高校が導入したグローバル教育やICT教育、地域のスペシャリストを教師として招く取り組みは、島根や離島といった地域性に関係なく、本来は現状の日本において当然に取り入れるべき内容の教育だと思うのですが、高校がなくなるかもしれないというような危機的状況に置かれないとそうした改革はできないのでしょうか、というご質問です。



(岩本)

今いただいたご質問に関しては、学校の存続とかの危機がないとできないのかということですけども、ひと言でいうと、全くそんなことはない

ということですね、結論は。全国的に見たときに、別に学校の存続危機のないところでも地域と一緒にやってのプロジェクト型の学習だとかグローバルだとか、たくさんやってるところは先進的な事例であります。学校の存続は一つに分かりやすいきっかけとして活用はしやすいかと思いますが、別になくても問題はないと思います。

やっぱり一つ、その学校の存続って、どちらかというと、地域側の問題意識を持つ地域側が何とか学校を残そうとやっていう形で動く傾向ですけども、そうじゃないところでどうやっているのかというと、今日のシンポジウムのテーマでもあります、地域の若い人たちの流出を何とかしたいということですね、動機の一つは。

外に行ってもやっぱりどっかで帰ってきてもらって、もしくは地元でできれば残ってもらいたいとか、そういった企業さんとか地域側のニーズからそういった動きをやっていこうという地域もありますし、あと学校側からすると、これから大学の入試改革なんかもどんどん進んでいってる中で、本当に生徒たちの学びの意欲を高めるとか、今後必要になってくる力を広い意味での学力、学ぶ力を育てていくという中で、教室でのレクチャー形式、トークでやっている授業だけでは駄目だという中で、今フェブラリーとかいわれてますけども、そういったものを積極的に導入していこうと。そうした中で、地域という絶対好の学びのフィールドなんかも活用しながらやっていこう。そんな動きの中で起きてるところなんかもありますので、一つのきっかけとしてはありますけども、それにこだわらないということなんです。

(畦地)

ありがとうございます。次の質問です。海士高校には「ヒトツナギ」があって、そこで地域との協働でさまざまな取り組みをしているそうですが、どのようなことをしていますか。また、そのように地域と一緒に物事を進めるにあたって、苦労された点は何でしょうか。

(岩本)

「ヒトツナギ」という、いま部活動になってます

けども、もともとは生徒たちが、隠岐諸島って結構観光客がこの20年ぐらいで3分の1ぐらいに減っていたりとかして、観光を何とかしたいという課題がある中で、生徒たちがこの地域の新しい観光プランを考えよう、企画を考えていこう。そんなことをやっていました。

授業で、あと課外活動的にやってたんですけども、その中で生徒たちから出てきたのは、この地域の新しい観光の資源として、もしくはこの地域のほんとの魅力って人じゃないかと、もしくは人と人とのつながりじゃないかということを生徒たちが言って、今までは自然だとか文化、歴史、高知だと坂本龍馬とか、そういったものを要は観光資源だといってやっていってありますが、うちの島のもう一つの切り口としては人だと。

今こうやって生きている、もしくは人と人とが一緒になって思いを持ってやっている人たち、これを魅力として捉えた観光企画というか、彼らはそれを今、魅力だからもっと伝えていきたいという視点が強かったですけども、やっていこうということで、そういうのを感じられるツアーを企画しました。

外から、彼らは高校生ですので、お客さんは自分たちが最も手が届く、自分たちだからこそ価値を提供できるターゲットは高校生とか中学生だろうということで、中高生をターゲットとした観光企画を考えて、全国からこの町に来る、かつ地元の子たち、地元の中高生も一緒にお客さんとして、地元の子たちと外から来る子たちがペアになって指令とか探検、探検というか冒険というか、「オオタさんを探せ」みたいな指令があると、それをクリアするには地域の人たちにいろいろ話しかけたりもしなきゃクリアできない。そういうような課題をクリアする中で、外から来た子と地元の子の関係性も深まるし、地域とのつながりもできる。地元の子たちも地元の再発見につながる、そんなことを考えた企画を彼らは立てました。

これが結構生徒たちも面白くて、もしくはそれに参加した県外から来た中学生が、今度は自分たちがこの「ヒトツナギ」をやる側になりたいということで、島前高校に入学してきて、「ヒトツナギ」をやるというような形がどんどん生まれてきて、生徒た

ちもただのイベントで終わらせずに、ずっと活動続けたい、じゃあ部活動という形にすれば、存分に活動できるし、継続してやれるということで部活動になって、今もそういったツアーを代々いろんな形でやっているというところですよ。

やっぱり地域の方たちと一緒にやるときの一つの肝は、生徒だけでやると、それをコーディネートする側がどれだけちゃんと地域の人たちと関係性をつくれるかどうかというところが大きいかなと思ってます。ただ、生徒を行かせて、「はい、やってきてね」というだけではなかなか学びが深まらなかったり、生徒がうまくできない部分とか、取っかかりもありますんで、コーディネートする側が地域のキーマンだとか、ネットワークを持ってる方たちとやっぱりちゃんとコミュニケーションをとってやっていくと。

場合によっては、いま生徒たちこういう状況だから、地域の方に今度生徒がそういうので来たときに、「叱ってもらって構いませんから」、もしくは「厳しくやってください」とか、そういう形で一定、なかなか教員が言っても生徒が聞かないとか、そういったケースがたくさんあるので、親が言っても子どもは聞かないと同じようなもので、それを地域の方たちから言ってもらうと、ものすごい生徒たちに響きます。

それだけのコミュニケーションなしに生徒が行って、何かあそこの生徒はほんとにだらしなやか、やる気がなくて困ってるとか、何かいろいろ逆にクレームになるところを、ちゃんとコミュニケーションとってやっていくと、逆に地域の人たちが地域の教育力、地域の方たちの教育力を発揮していただいて、生徒たちの学びにつなげていけるということですね。そこでコーディネーターの地域の方々との共有を含めた、学校をまきこむとか、そこら辺をつなげる力、人つなぎの力みたいなものが問われるところなのかなと感じてます。

(畦地)

ありがとうございました。質問をたくさんいただいていますけども、議論を少し深めたいと思いますので、皆様からいただいたご質問につきましては以上

にしたいと思います。実はここまでは一応打ち合わせしてたのですが、これからは打ち合わせしてないので、今話を聞きながらこの次どうしようかなと思いつつ聞いてる中で、岩本さんに僕から質問です。

今、地域に生徒を出して、地域の課題を解決させる学習だということをおっしゃられて、その際にコーディネーターの役割は非常に大事というお話されたんですけども、実は、我々の地元の大方高校でも、開学のときから「自立創造型地域課題解決学習」という授業をやっています。これは地域から生徒に課題を何個か与えるんですね。その中から班に分かれて、自分たちの班はこのテーマで取り組みたいというのを取り組んで、地域に出向いてヒアリングをして、課題解決策のプレゼンをするという、そういう授業です。地域課題解決型。

当然その各班に先生が付きます。関係者がいらっしやったら申し訳ないですけども、やはりその付く先生の力量によってその班の出来ってすごく違うんですよ。もちろん地域の受け入れる側の地域力も当然ありますけれども、地域と生徒をつないでコーディネートさせる先生の力量というのはすごくあって、ここら辺が新しい大方高校の学びを続けるために、申し訳ないですけども、今の県教委の抱えている高校の先生方には少し足りない部分なのかなあと思ってるんですが、そちらのほうはどうでしょうか。

(岩本)

島根県はこういう話なかなかね、関係者がいないんでにくいところなんですけども

(畦地)

僕もしてますよ。

(岩本)

正直、教員のそういう資質みたいなところが、そういう形の課題解決型学習に関する資質とか経験がかなり問われる。それによって左右されるというのは当然あります。そのときに、いい先生が来なければできないではやっぱり広がらないし続かない。ですから、これをどう仕組みとしてできるようにし

ていくのかということが、地域側とか学校を経営する側とか、もしくは地域と学校で一緒にやっていく人たちに問われてることだと思うんです。これがまず知恵の出どころだと思います。

ほんとにスーパーな先生たちが来て、その人がいいことをやってくれるとか、当然それはすばらしいですけど、そんなことめったにないですし、絶対続かないですから。こんなに異動が頻繁に起きる中でですね。仕組みとかもしくは文化にしていくところですよ。

その中でどうやっていくのかというものが、多分いろいろなやり方があると思います。島前とかでやっているのは、コーディネーターという地域の人、地元出身で地域のことを分かっている、学校のことも分かるというような人がコーディネーター役としていて、その人は高校の教育のルール変わっても、その役割は多少人が変わっても、地元のことも分かって学校の教育のことも分かるという役割の人がちゃんとして、その授業、例えばこういうテーマだったらこの人に来てもらったらいいとか、この人にメンター役やってもらったらいいとか、そういう形でかわる、そういう役割をちゃんと担保していくことだと思うんですね。

あと、嶺北高校、窪川高校、いろんなところでやってますけども、そういう地域の学びを応援する地域の方たちのNPOとか住民団体の方とかそういう方たちの協議会だとか、その協議会の中にある分科会とか部会みたいなのがあって、その部会の人たちが生徒たちの地域の学びをどうサポートしていくか、そんなことをそこで考える仕組みがあるので、生徒たちがその中で、自分たち今こういうことやってる、これ困ってるみたいなのを発表させてもらったりして、その人たちからいろいろフィードバックしてもらおうとか、人を紹介してもらおうとか、そういうある程度、仕組みの中で生徒たちの学びをやっていくということが重要なのかなと思ってます。

ただ、中長期的に見ると、教員もそういうことができるようになっていかなきゃいけないというのは当たり前、当たり前というか、今後の流れの当然主流になっていくと思いますので、今やってるのは、

この4月からはコーディネーターの養成コースというのも立ち上げて、島根大学というところと一緒にあって、全国のそういうコーディネーター的な役割を、学校と地域をつなぐというので果たす人たちが、オンラインとかを中心に、現場で学べるようなコースを1年間かけてつくって立ち上げてやっています。あと教員養成とか教職大学院とかでもそういったプログラムを提供しながら、教育にかかわれる関係者を今度は育てていくというところを今少し試行を始めているというところですよ。

(畦地)

ありがとうございます。我々の努力もちょっと足りないというところもあります。今、岩本さんからありましたように、やっぱり中長期的にはそういう力を持った教員も必要なんだろうと僕も思います。ぜひ地域協働学部の中から、そういう先生も誕生していただけるとうれしいなと思うということと、これからの議論は、やはり高校を残そうという議論ではないですね、今日の議論というのは。何のために高校が要るのかというところから出発をして、そもそも私たちはどういう地域をつくりたいのかというところに焦点を当てると。じゃあそのための若者、どういう人材が要るのか、そのための教育はどうあるべきかというのが、多分今日の議論だと思うんですね。

そうしますと、そもそも高知は何のために若者を残したいのか、どういう若者が欲しいのか、そのためにどういう教育をするのかというのが多分議論の焦点になってくるのだと思いますので、少しそこにフォーカスをしながら今後の議論を進めさせていただきたいと思います。まず先ほどご説明をしていただきました地域の取り組みの中で、それぞれやられた結果、いろんなことを感じられていらっしゃると思うので、まずその点からお聞きをしたいと思いません。

まず、高石さんにお聞きをしたいんですけども、振興会あるいは「プロジェクト41」などの活動することによって、それに参画をされた地域の皆さんの気持ちといたしましょうか、思いといたしましょうか、そういう変化などはあったでしょうか。それに

ついて少しご説明をお願いします。

(高石)

「プロジェクト41」を立ち上げていろんな話をする中で、一番の収穫は方向性が一つになったということです。議会なんかでもいろいろとやってきました。行政、学校も取り組んでますし、それからPTAもやらないかん。地域も心配もしてます。そういった中で、みんなが同じ方向を向いて足並み揃えてやっていこうと、方向が一つになったというのは一つの収穫。また、どんなに動いてるのか、学校がどんなことをしてるのか。それから、行政側でどういう取り組みをやるか。議会で議員さんたちは何を取り組んでいるのか。そういったことを情報共有をすることがまずできたということが「プロジェクト41」の収穫。

ただ、じゃあみんなが提言書にあることを実行に移しているかということ、なかなか実行には移せないところがあります。そこで今年、振興会の会長になって、メンバー・役員を一新して、実行できる人間をある程度入れて、とりあえず実行に移せるような体制というものもつくっていかないかんのかなと。はっきりいうて、行政の方に随分入ってもらってます。そうしないと、提言書で、こうやるといいですよというだけではなかなか思ったところに進まないです。

(畦地)

具体的にアクションにしていかなければ、言いつばなしでは駄目だということですね。

(高石)

提言書だけつくって、見て終わりなので、思いはあるけど、やっぱり実行に移せる母体を編成せんことにはなかなか厳しいかなと。そういうことで、さっき言ったような人たちに協力隊として入っていただいたりという動きはしています。

(畦地)

そういう意味では、冒頭に私が言いましたように、高校を残せというだけの段階から、じゃあ我々

は何をすべきかという段階に移ってるという、そんな感じでしょうか。

(高石)

そうですね。何ができるかは、もう言うとおりにしますんで、何をするかになっています。しないと進まない。だから、そんな悠長なこと言って計画だけ立てている場合じゃないので、要はできることからとにかくやっていくというアクション、そっこのほうを早めています。

(畦地)

ありがとうございます。続いて、高校生の2人、特に岡村君は3年生なので、3年間嶺北高校でいろんな活動をしてきたということですが、1年生より2年生、2年生より3年生で、多分心境の変化とか気づくことがいろいろあったと思うんですけども、自分なりに高校3年間を振り返って、こんなに気持ちが変わってきましたというようなところがあれば、お願いします。

(岡村)

先ほど高石さんからご紹介いただいたとおり、僕、小学校のときは市内に住んでました。中学校でちょっと事情があって嶺北に行くことになったんで

すけれども、中学校3年間は全く地域ということに念頭を置いてなくて、嶺北高校に何となく進学というか、いや、それでも面白そうだから進学してみようというのもありました。

高校1年のときはまだ地域というその概念がなくて、先生に生徒会に入ってみないかと言われて、生徒会に入って1年間やったんですけども、具体的にどういうことをすればいいのか、高校1年のときは分かりませんでした。

高校2年になって、生徒会長をやらせてもらったんですけども、そのときに他校の生徒さんとお話をする機会があったんですけども、うちの生徒会ではそんなことしないよということを言われまして、うちの自主活動の話のときに、うちの高校はとて特別なことをやっているのかなという意識がそのときに出始めました。自分たちがやっている活動に誇りを持てるようになってきて、そのときから、地域とかかわるということはどういうことかというのを高校2年のときから少し考え始めました。その頃から、そのときまでであった活動も活発的になってきて、それまで嶺北地域限定で活動していたものがだんだん高知県下に活動が広まるようになってきて、自分たちの活動が認められるということがとてもうれしい時期でありました。

高校3年のときには、もう生徒会も引退したんで



すけども、まだ何かやれることはあるだろうと、そのとき既に受験勉強が始まっていて、すごい忙しい時期ではあったんですけども、それでも普段育ててもらっている地域の方に何か恩返しができないかという気持ちで頑張っていました。

(畦地)

冒頭のほうに言っていた、自分の中に地域がない、地域という概念がないという感覚はどんな感じですか。

(岡村)

地域で育った方っていうのは、やっぱりふるさとといえばここでしょという確固たるものがあって、でも、そのときまだ僕にはなくて、小学校のときはずっとマンション暮らしだったので、何かこう故郷といわれても、どこが故郷なんだろうっていう、果たして今自分が住んでるマンションのこの部屋がふるさとなんだろうかみたいなことも考えて、いや、でもやっぱり違うなと。何かぼんやりとしたものしかなくて、でも今、市内で12年間、嶺北で6年間育て、今18ですけども、どっちがふるさとに近いかって言われると、嶺北というのがすぐ浮かんでくるんですよ。

それはなぜかという、古川さんが話されたように、地域を深く知っているということがやっぱり大事だと思うんですね。嶺北地域っていうのはものすごく魅力がたくさんあって、何をやるにしても材料が調っている。じゃあ始めようということがすぐできる。あとは、自分が暮らしていて誇りに思えるという、そういう地域だと思います。なので、心の中にある地域というのは、何か自分たちが当たり前で暮らしているけれども、その当たり前の中に誇りに思えるものがあるっていうのが、それなんじゃないかなって思います。

(畦地)

何か聞き入ってしまいましたけども、ありがとうございました。そしたら、敷地さんは高校1年生ですよ。窪川で生まれ育って、地元の窪川高校に進学したということですけども、進学する前に思っ

ていた窪川高校と、進学してこの1年間経っての窪川高校は一緒でしたか、違いましたか。同じところも、当然違うところもあるでしょうけれども、その点をお願いします。

(敷地)

私は、中学校2年生ぐらいにもう窪川高校に進学しようと思ったんですけど、でも、窪川高校のいいところを一つも知りませんでした。お母さん、お父さん、お兄ちゃんが窪川高校に通っていたというのもあるし、私は将来町外に出るより窪川で働きたいと思ったので、それだったら就職するときに、窪川高校で、窪川に住んでたほうが自分の強みになると思って、窪川高校に行こうって決めました。

なので、高校進学するとなったときは、ほんとにそれだけの理由で、窪川高校がどんな活動をしてどんないいところがあるかっていうことがほんとに分からなくて、中学校3年生のときは、窪川高校の生徒会とかが高校の説明をしに来てくれたりもしたんですけど、あまり頭に入ってこなくて、でも実際将来働くために頑張ろうと思って高校に入って、いざ入学したら、入学したときから活動は全部濃くて、部活動も中学校のときはこんな部活があることを知らなかったし、みんなそうだったと思うんですけど、窪川高校は市内に比べたらレベルが低いとか、全然充実してないとか、妥協して入るみたいな、学力とかもそんなに高くなくても入れるっていう、何というか、ほんとに自分も妥協して入ってる部分があるがじゃないかってぐらいの気持ちで入ったんですけども、入ってみたら、行事とかも先生との距離が近くて、多分市内の学校に流されて行ったら、こんな楽しいこともしなかったし、自分で行動する力もつかなかったし、いい先生とも出会えなかったし、将来に向けて充実した活動もできなかったなと思います。高校に入ってから良さが分かりました。

なので、もっと中学生にこの高校がしていることを伝えていけたら、進学率も上がると思うし、窪川高校でいいやじゃなくて、窪川高校がいいって入ってきてくれる中学生も増えるんじゃないかなと思います。

(畦地)

ありがとうございます。校長先生が学校回るよりも、彼女に回ってもらうほうがよっぽど入学生増えるかもしれませんね。すばらしい。



(窪川高校校長先生)

そのとおりだと思います。

(岩本)

今の話すごい興味持ったんですけども、まず、そもそも

何で中学校のときから窪川で将来働きたいなんてことを思ったのかというあたりは、今日のテーマにつながるヒントがあると思うので、そこら辺を教えてくださいませんか。

(敷地)

私の夢が、窪川で働く保育士です。何で保育士なろうかと思ったのは、私自身が地元の窪川で育ててもらえてほんとに良かったと思うからです。それは小さいときから、家の近くの四万十川で泳いだり、お兄ちゃん、お父さん、おじいちゃんについてってアユを捕ったり、魚を捕ったり、いろんなことをしました。あとはタケノコも掘りに行ったし、畑へ行ってナシとかブドウとかをいっぱい食べたりしてもらったり、近所の人もあたたかくて、人は少ないけど、その分人とかかわりが強いので、小さいときからずっとお世話になったおばあちゃん、おじいちゃんとかに恩返しするためには、この地域をそのままつなげていくのが一番だと思ったのと、自分みたいに人と自然とかかわりが大きい窪川で、元気でアクティブで自分のことをちゃんとする子どもを育てる助けができたらいいなと思ったのが動機です。

(岩本)

ほんとにすばらしいですね。ちなみに、今、高校で部活をされてるということで、実際、地域で何かやるとかっていうことのどんなところが楽しいのかっていうのと、いわゆるその魅力みたいなのを聞きたいのと、あと、周りの生徒は実際どうなのと。それ

は敷地さんが非常に、何というのかな、特出した何ですかね、いい意味で変態で、たまたま敷地さんだけがそう思って、それで校長先生に選ばれてここにいるのか、周りの生徒も結構そうなのか。当然全員がみんなそんなふうになってるとは思えないんですけども、そこら辺、周りの生徒のことなんか合わせて、敷地さんは何が楽しいのか、周りの生徒はどんな感じなのかというのをちょっと教えてもらえたら。

(敷地)

私が楽しいのは、中学校と比べたら高校は人数がすごい違うんですよ。中学校は1学年100人ぐらいだったんですけど、高校に入ったら全校が100人になって、だから、自分自身が動かないと何かする機会も少なくなるし、行事も横から見ているだけじゃ何も楽しくないなと思いたして、地元の高校なので、保育園、小学校、中学校、高校とずっと一緒に友だちがいるんですけど、その友だちならしてきたことも一緒だし、したいことも似てて、なので、その人たちと一緒に何か楽しいことをしよう、自分たちでつくろうっていう達成感とか一体感とかが生まれてきて、それがすごく楽しいと思います。

でも、周りには「高校を卒業したら絶対都会に行く」とか、「窪川を絶対出たい」みたいな人たちもいるので、それは、人の考えの違いと割り切って、その場その場でどうしたらその人たちも一緒になって楽しめるかと考えるのが、自分の性格というか、高校を充実して過ごせるためのつながりなのかなと思います。

(岩本)

ありがとうございます。今お話聞いて、結構面白いコメントが幾つか出てたと思います。というのは、一つは窪川高校も嶺北高校もそうだと思うんですけど、規模が小さいからこそ一人ひとりの役割とか舞台とか、活躍の場みたいなものがやっぱり大きく変わる。1万人いるうちの1人だと、1万分の1。100人のうちの1人だと、100分の1。1万と100だったら、1万のほうが数は多いけど、でも1人の役割というふうに見たときに、1万分の1より

100分の1のほうが大きくなる。まさにこういう小さいからこそできるものなのですね。やっぱりそういった部分なんか逆に魅力になって、濃い仲間だとか、自分の役割の中での達成感、そんなのがあるのかなと思いました。

資料の17ページの下「【これから】縦と横での協働による教育体制」というところに少し変な図があるかと思うんですけども、先ほど高石さんとか岡村君の話を聞いて、ああなるほどなと思ったことがあったので、少し紹介させてください。この図で、そういう地域をつくる人づくりのときのポイントでよく言われてるものって、「in」「about」「for」「with」というふうに書いてます。

これ何かというと、小さい頃から発達段階に合わせてどういう教育活動が、その地域に対しての愛着とか誇りとかを育てていくのに効果的なのかというもの、段階キーワードとかが出てくるんですけども、「in」というのは、地域の中で体験する、浸るという、いわゆる地域にどっぷり浸りながらするさまざまな原体験が起こっていくということで、先ほど敷地さんが言われてましたけども、地域でいろんな体験をさせてもらったとか、こんなことをやってとか、こんな風景、まさにそういう活動とか体験ですね。これって、小さい頃にどれほどそういう原体験をしっかりと持っていくかということが、将来的なその地域に対しての愛情につながるというようなところなんです。

次は「about」って、地域について調べるとか知るとか、伝えるとか、考えるというフェーズですね。結構その地域のことを好きになってもらおうと思ったときによく起こりがちなのが、地域の魅力の詰め込み教育みたいなことをやろうとするわけですね、大人は。この地域がいかにいいかみたいなことを徹底的に教えてやろうみたいな、こんな歴史があって、こんな偉人がいて、それでこうだったんだみたいな、この場所がみたいな、もう詰め込みを押し込みというか、プッシュプッシュするわけですね。

それはそれでいいときもあるんですけども、でもやっぱり自分たちで調べていくとか、知っていくという、詰め込まずともいろいろなテーマとか興味と

か関心を引き出しながらやっていけば、自然と知っていく、調べていく、学び取っていく、つかみ取っていくというような、そういった中で知っていくということも、やっぱり参考書をデザインしていかないと、いくら詰め込まれても、そのときの感想文では、「この地域すごいと思いました」、「すてきな人、偉人がいたんですね」とか書くけども、やっぱりその後、聞いたりとかすると、「あんまり面白くなかった」とか、「もう十分です」みたいな感じになっていくわけです。一方的に詰め込まれると。地域を深く知るというの、まさに岡村君が言ってましたけど、そういったとき、詰め込まずとも知れるような形にしていく。

次「for」のところですけども、地域のために実践する、行動する、貢献するとかいうことで、これで何かを、高石さんがおっしゃってましたけども、いくら提言をしても物事変わらない、進まないわけですよ。子どもたちの活動もそうなんです。地域の課題解決型学習とかって言ったときに、何か生徒たち調べて、「じゃあ何かで発表会しましょう。地域の課題こうでした。こんなことやっていいと思います」みたいなことだとか、誰かに対して、「行政さん、こういうことやるべきだと思います」という発表をして、「ああ良かった、良かった、すばらしい発表でしたね」というようなことで課題解決型学習修了というようなことがやっぱり多々あるわけです。

これはこれで意味はあると思いますが、例えばそれは地域について調べて発表する、考えて発表するという後々の段階ではいいんですけども、やっぱり中学生とか、ましてや高校生ぐらいになったら、それを誰かにやってくださいよと、当事者意識なく、こうしたらいいですよではなくて、こうやっていきたいんだと、だからこの部分協力してほしいだとか、当事者としてちゃんと提言していく、協力を求めていく、呼びかけていく、巻き込んでいくとか、自分たちはこうやっていきます、だからこの部分をみたいな形で、もしくはぜひこれを了解してくださいと、だから自分たちがやりますからというような形での実践、まさに言われていたアクションにつながる、もしくはアクションを前提にした提言だとか

課題解決策を考えていくみたいなのを、中学生とか、ましてや高校生ぐらいになったらやっていったほうがより、先ほど皆さんが出していただいた、こんな若者に育てたいというものにはつながっていくかなと思っているところです。

(畦地)

ありがとうございます。先ほど古川さんのお話にも、それから岡村君の話でも、小さいときにそのふるさとしていう気持ち、概念がなかったっておっしゃいましたね。多分それは、この「in」あたりの体験がまずない。そして「about」もなかったということなんですね。けれども、敷地さんの場合は「in」と「about」があったのかなと思うんですけども。

我々も特に小学校の先生には、地域のことをちゃんと教えてねということで、「黒潮町のまちのこと」という3年生・4年生向けの副教材を作ってるんですけども、まあ学校に行くときれいなんですね、きれいなんですよ。これ一度も開いたことがないんじゃないかなと思うようなこともあって、先生方に言うと、なかなかオールジャパンの学習時間を確保しなくちゃいけない。そこに地域学習を入れるというのはなかなか大変というのは、分からないわけでもないんですけども、海士町のほうではそこら辺、特に小学生に対して、地域学習の時間、ほんとに地元のことをここでいう「知る、伝える」、そういう授業はどのようになさってるんでしょうか。

(岩本)

例えば小学校だと、一番分かりやすいのは、小学校6年生になると、全員がこの「about」のところで「子ども議会」いうのをやります。1年間通して自分の興味・関心から課題を見つけて、その課題解決を考えていくんですけども、そのときに高校生とか中学生にかかわってもらって、当然地域に調べに行ったり、アンケートを取ったり、体験させてもらったりとかしながら、それで最後2月ですけども、毎年、町長とか議員とか行政の執行部とか、議場で1人一つ政策というか、提言していきます。

これまず提言です。基本的には、夜暗くてこうい

うところで危ないとか、こういうのがあるから自分たち帰れないとか、だから、こういうところに太陽光のこういうものを設置してくれないかと。これは予算がいくらぐらい掛かるけども、こういう形だったら安くできるんじゃないかと、アカテガニが渡っていて、そこでよく車に轢かれてる、学校の周りとか道でつぶされてる。これ調べたら、結構絶滅危惧種というか、減っているやつだし、それ以上にかわいそうだと。これを守りたいと。そのためにこういう看板を作りたいんだ。そんな提言をしていくわけです。

そのたび、町長とかが、それは面白いからやろうとか、それはいいとか、もしくはここまではやっていくと。看板を付ける費用は出すから、自分たちでその看板の絵を描いたり、その活動をしてねとか。そういう中でジャッジをしていくんです。大体半分ぐらいの活動は、何らかの形で実現とか前に進めてる。そんなことを通して、自分たちも町を変えられるんだと、自分たちも地域の一員として当事者意識を持ってやっていくことで地域は良くなっていく、もしくは自分たちも一緒にやれるんだというような感覚を小学校のときにはやって、中学校になると自分たちでもって実践しましょうとか、そんなふうにかかわっています。

(畦地)

ありがとうございます。多分ここで参加をされてる方の中には、高校の、ひと言でいうと魅力化ということに興味があって、例えばそういうことにぜひ取り組んでみたいと、取り組まなければならない状況に置かれているというような方もいらっしゃると思いますが、実は私の経験から言いますと、県立高校というのは、非常に壁が高いです、正直言わせてもらおうと。今は違いますよ、うちの高校も違いますけども、10数年前までね。

地域にありながら、なかなか県立高校と一緒にいるんなことのできなかった時代があったんですね。けれども、今は全く違いますけれども、ひょっとしたら皆さんが県立高校に行こうと思っても、なかなかその大きな壁が立ちはだかる場合があるかと思うんですけども、嶺北高校の場合は、高石さん、

最初から現在、いや、過去から現在どんな感じでしたか、高校と地域との何か、距離。先ほど岩本さんから、地域と高校の距離は遠かったってお話がありましたね、距離の問題ですけども、どんな感じでしたか。

(高石)

そうですね、実際に高校の再編振興計画、これが持ち上がって、実際、嶺北高校の生徒が41名を下回るまでは、そこまで嶺北高校に関心がなかったのかもしれないと思います。そしてまた、地域が嶺北高校をほんとに心配して、嶺北高校存続に向けて何かせんといかんかなという思いになることはそれまではなかったし、実際私も嶺北高校に子どもが入るまでは、嶺北高校にそんなに行くことはなかったと思います。ただ、入ってからの状況を見ると、随分と変わったかと、最近は思います。いろんな方も嶺北高校に入って、いろいろ活動もされております。

ただですね、同居している嶺北中学校は身近だとして分かってるかもしれませんが、連携型の隣にある土佐町中学校というところも生徒が半分来てるんですけど、いま敷地さんの言われた、中学校に伝わってない、伝えていきたいという話があるんですけど、じゃあ伝わってるかと言うたら伝わってないと思います。岩本さんが言われたように、じゃあ詰め込むのかというと、それをしてもなかなか伝わらない。

当事者意識というのを今言われたんですけど、当事者意識があったときもあります。それがまた薄れてきたりもします。それを絶えず中学生、小学生に、入ってみて良かったじゃなくて、小学校にいる間から嶺北高校のこともよく分かるようにしていかないと、中3になってから伝えようなんて思っても嶺北高校のことは伝わらないし、日常的に地域とか小・中学校に伝えていっていないと、なかなかその入ってみて良かったでは、もう高校としては魅力化というのは自己満足になってしまいますので、そこそこはこれから課題だなと。

ただ、当事者意識を高めていくというのは中学生にせないかん。ただ、中学生も持ってます。同じ

ように、将来はふるさとへというのは持つてるんですけど、それがやっぱり高校までは地元でというのは我々の考えですので、それを小・中学校の間から高校の魅力を伝えていけるような仕組みをつくりたい。そういうふうに思っています。

(畦地)

ありがとうございます。参加者の中には高校の先生もいらっしゃいます。ぜひ高校の先生にも聞いてみたいと思うので、窪川高校の校長先生、ぜひですね窪川高校はこういう目的でやってるんだというのを、皆さんにぜひPRも含めて、学校の取り組みを少しご紹介してください。

(窪川高校校長先生)

窪川高校の森本といいます。油断してました。やっぱり学校の説明、中学校への説明は敷地さんにやってもらったほうが絶対いいなと思っています。

距離感の問題からちょっとというと、県教委の立場もあって、ちょっと違うでということも反論しちゃかんと、一方的に畦地さんに言われると困るところもあるんで、ちょっと反論しちゃきます。

確かに子どもたちがいっぱいおるときには、県立高校ってというのは1校で完結すると、人事にしても教育内容にしても学校の中で完結するというのが一つの考え方でありました。ただ、まだ市内のほうは子どもたちが多いので、一つの学校で完結するっていう認識があるだろうし、それをやっていってもまだまだ持っているんですけど、中山間地域の小規模校はもう先生の数であるとか生徒数を考えると、もう一つの学校の中だけで完結するということはできない。でも、やっぱり昔のその完結できるっていう認識で来られて、それをできんっていうふうに意識の転換が完全にできているかということ、まだやっぱりできていない部分もあるので、その部分が恐らく畦地さんが言われたように、高校との距離感がまだ高いという部分が残っているんだろうと思います。

ただ、これからの時代は、絶対中山間地域の小規模校だけでなく、高校が学校の中だけで完結するっていう方向ではないと思うので、そういう意味では先に中山間地域、小規模校のほうが大規模校よ

りは気がついて、地域とかそれから外の力を借りて、学校の教育をしようという方向に進んでいると思います。それはもう全国的な流れ。だから、中山間地域の小規模校のほうが、実をいうとこの教育の、岩本さんが言われたようにもうトップを行ってるんじゃないかなという、そういうつもりで学校経営をしています。

実を言えば、小規模校に行ったんで、ちょっとうちから遠いんですけど、窪川高校が今すごく楽しくて、窪川高校が結構楽しく経営を、経営という言い方おかしいですけど、運営させてもらっています。

課題はやっぱり生徒数が少ないということで、小さい中で密度は濃いんですけど、やっぱり切磋琢磨する高校教育の提供ということがやっぱり希薄になります。だから、それも一つ考えて、例えば隣の小規模校の高校であるとか、そういうところとちょっと、ずっとじゃないんですけど連携しながら、お互い文化の違う交流というのを広めていくというのが、これから考えていかなければならないんじゃないかなと思っています。

今日ここへ来て思ったのは、もう高知県の中だけでなくでもいいんじゃないでしょうか、日本全国に視野を広げたり、それから言葉の壁を超えていったら、東南アジアとかそういうところのほうにもつながりできるんじゃないかなと感じるシンポジウムになりました。まだそこまで具体的な方向は県内だけでですけど、これから先は日本全国とか世界を見据えた受け入れが必要というのは、大規模校より中山間地域、小規模校のほうがやりやすいかなということを感じています、今んところ。

(畦地)

ありがとうございました。

(瀬戸)

すいません、1点質問をさせていただいて、よろしいですか。

(畦地)

質問ですか、はい。



(瀬戸)

すいません、土佐町の瀬戸昌宣と申します。先ほど高石さんからご紹介ありました、パクリ、嶺北高校の教育魅力化特命官を仰せつかりまし

て、今年の1月から土佐町に入ってます。僕は昨年の大晦日にアメリカから家族で帰ってきました。アメリカは大体10年間ほどちょっと研究教育をやっていたんですが、もう皆さんの話、僕「うんうん」というか、おっしゃるとおり、今隣にいる僕の上司も、何か瀬戸君がいつも言ってるのが全部ここにあるなみたいな話になってたんですけど。

僕もやっぱり小さいということがすごくアドバンテージだという話を来た当初からずっとしててんですが、特に地域の人材をどんどん高校に利用してくれたらと僕も思うんです。どんどんおれを使ってくれと思うんですね。英語の授業であってもサイエンスの授業であっても、数学の授業であっても、何でもいいんですが、ただ、僕もそういった形でかわろうとすると、高校の先生たちが「いやあ瀬戸さんは学位、博士持ってらっしゃいますが、教職免許持ってらっしゃいませんよね。そういう方に授業していただくわけにはいきません」というのが、もう枕詞のようにずっと出てくるんです。これは高校レベルでも中学レベルでもそうです。

ただ、もうそういう要するに制度が、教育って常に社会の変化に後付けでやっとな追いついていく。つまり、いつも1周2周遅れなんですよね。その制度を待っていると、もうせつかくその中山間地域で小規模校で最先端を僕らが走ろうとしているのに、常に足かせがそういった制度なんですよ。岩本さんも多分島根県のほうで、民間人材を採用するというような形やっとならっしゃいますけど、そういった形で、県としても、あと学校としても、そういった方にもうちょっと門戸を開く特例のような形がやっとないただけないのかなと思うんですけど、そこら辺に関して。

(畦地)

嶺北の校長先生もいらっしゃるとお聞きしたんで

すけれども、その件、嶺北の校長先生も少し、学校のPRも含めてでよろしいですので、お答えください。



(嶺北高校校長先生)

まず、敷地さん、ぜひうちの生徒会と交流を、それが1点です。

嶺北高校の校長です。川島と申します。ほんとに今日はこういう場にこらせていただきまして、誠にありがとうございます。

嶺北高校、岡村が言いましたように、部活もやり生徒会もやり、自主活動もやり、ほんとに何役もやってくれています。教員も部活顧問もおり、自主活動も担当しているということで、ほんとにあっぶあっぶの状態、とにかくもう学校教員、学校だけでは対処できない問題がたくさんありまして、そういうのを地域の方にご支援をいただくしかないとは考えてますし、学校だけでは限界が来ています。ですので、私は協力していただくことに関しては、もうオールオッケーという気持ちです。もう力を貸していただける方には全部貸していただこうと。

今、瀬戸さんがおっしゃったように、学校の教員というのは自分たちが中心、外部の人を見ても二の次というそういう意識がまだまだあるんで、そういう意識も変えていかなければできませんし、確かに授業というのは教員免許がないとできませんけど、今TTがあり、学習支援員制度もあり、いろんな形で生徒とのかかわり構造ができておりますんで、まずできることからやっていただいて、教員の意識も変えていきたいと考えております。以上です。

(岩本)

今、校長先生もおっしゃられてましたけど、瀬戸さんのお話伺ってちょっと思ったのは、半分は生徒さんの責任もあるような気がしていて、恐らく教員免許がないから頼めないというのはある種の言い訳で、言い訳というか、多分怖いとか不安感とか信頼関係ができてないから、そう逃げるんだと思うんですよ。

教員免許がなくなつて、1人で授業をやるというのはそれはある種特別教員免許とかいろいろ、いま既存の制度の中でもある程度何かちょっと使わなきゃいけないけども、別にそうじゃなくてもいろんな形でその授業だとかにかかわれる余地は当然ありますし、ほんとにいい形だったらかかわってもらって、助けてもらえるんだったら助かるということだつて正直あつても、やっぱり信頼関係とかができてないと怖くて、外部の人に開くとか入ってきてもらうとか、それで批判を受けるとか、もしそれがまた地域の中で、あの学校はこうだとかみたいなのがやっぱり広がっていくとか、そういうことに対するの恐れだとか、それは生徒や学校を守る立場からすれば当然あるわけで、そこをどうやってちゃんと信頼関係つくれたら、丁寧にというか、やっていっていかつてというのは一つポイントではあると思うんですよ。

例えば島前なんかで見ている、僕もそうでしたけど、学校に入らせてもらって、授業をやるとかではなく、一緒に掃除する、部活の手伝いをする、授業のTTみたいな形でなかなか授業に集中できない子たちを支援させてもらうとか、コピーをとるとか、そういうところで先生が助けてほしいということから入っていつて関係性つくつていくと、だんだんやれる範囲が広がっていったりだとか、もしか提案が通つていったり、もしか一緒に提案をつくつていける関係ができたとかつていうところです。

地域側はどうしても、僕もどちらかという地域側の考え方が濃いですけども、何かこう学校に対して批判的にとか、学校の壁が高いからやりにくいんだとか、教員の意識がこうだからみたいになりがちなんですけども、でも、学校に入るとまた違う世界が広がってきて、要は文化が違うというだけで、どちらがいい悪いの話じゃないので、その異なる文化がどうやって協働していくのかという、まさにそこそ縮図がそこに広がっていて、そこが今僕ら大人が試されているという。

だつて、子どもたちはそういったこれからほんとにグローバル化していく、多様な文化と一緒にやっていかなきゃいけないような時代を切り開いていく中で、まず大人たちがそういった組織や文化が異な

る者たちがどうやって一緒につながっていけるのか、協働していくのかっていうのがまず問われていて、それを乗り越えていく中で、子どもたちにそういう環境だとか教育が提供できるようになっていく。そんな物語がここにあるのかなというようなことを感じました。すいません、余談でした。

(畦地)

ありがとうございます。そろそろ議論が非常に盛り上がってきて、実はいろんな話を聞く中で、あれも聞いてみたいな、これも聞いてみたいなのが出てきたんですけれども、時間も押してきましたので、縮めの関係に入らせていただきたいなと思います。その前に、先ほど森本校長先生のフォローをするわけではないですけれども、私も今、一つの学校で完結していた高校がやっぱりそれだけでは駄目だ、やっぱり地域に生徒が出て行って、地域からも力をもらわなくちゃ駄目なんだということが起きているというのは感じています。

といいますのは、私の母校の某高校ですけれども、そこもどっちかというところ1校ですべて完結型で、校長先生以下、もう完全に一つのとりでの中で皆さん生活されているような学校だったんですけども、そこも地域の人に何か入ってきてもらって、ゲストティーチャーのような授業を今年からしたいということで、私もこの前行ってきました。ようやく某高校も、大方高校に遅れること十数年、そういうことにも取り組み始めたのかなというのを感じています。そういう意味では、嶺北もそれから窪川高校も先に行ってるというのは、私はほんとにそのとおりだと思います。

ということは、そういう教育がこれから我々高知だけではなくていろんなところで求められているというのが、どうも方向性として見えてきました。つまり地域を元気にする教育は、地域と学校が連携をしてやらなければ成り立たないということですね。学校だけで子どもを育てて社会へ送り出す今までのやり方というのは、要は通用しなくなってきた。その結果が、今我々が直面している社会問題だと思います。

そこで最後に、皆さんにお聞きをしたいと思いま

す。地域を元気にする教育、それをこれからこういうふうにしたい。あるいは高校生の方には、僕は将来こういうふうになりたいんだということも含めてひと言でお願いしたいと思いますので、まず、岩本さんからお願いできますか。

(岩本)

そしたら、一つは、先ほど校長先生とか言われた、まさに小さい学校は学校だけで完結できないという状況の中で、じゃあどうするのかで、一つは、先ほど出たように地域をどれほど、もしくは地域の人材を活用するかですよね。もう一つはやっぱり先ほど出てました、他の地域とか他の学校ですよ、それは例えば小さい学校で課題解決的な学習だとか、自分の興味・関心を深めて、探究的な学びとかやっていったときに、このテーマについて考えたりとかやってるのは自分しかない。ほかにもまたみんな違うテーマでやってる。

そうしたときに生徒の中で出てきたりするのは、ほかの分野の話を知るのもいいんですけども、やっぱり福祉なら福祉でもっとほかの高校生とかと語り合いたいとかいうのがあって、もしくは自分も意識高くやってんだけど、ほかの生徒の問題意識に比べると何だかちょっと議論がかみ合わないとか、そういう生徒出てくるわけですよ。

そうしたときに、実は小さい学校って、ほかでもそういった活動をどんどんやってるところあるんですよ。例えば島根県内だったら県内の学校でそういったことをやってるところが集まって、高校生同士が合宿とかでガンガン議論したりとか、自分たちはこんなことやってるとか、自分はこんなプロセスを持ってやってみたいに、喧々諤々、対話とかやったりするとすごく盛り上がるわけですね。

それで帰って、またSNSとかでつながり合いながら、お互いのプロジェクトを共有したりとかしながらやってたり、あとは、例えば長崎の高校とかとICTとかでつないで、それぞれがやってる活動を発表したりしながら、自分たちの学校でこの程度の発表がいい発表だみたいになってくるのが、先ほど岡村君とかも言ってた、高校2年生のとき他校の高校に行って発表したら、何か自分たちのやってるこ

との特異性に気がついたとかですね。そういう他流試合していく中で磨かれていくというところがあるので、そういったものをふんだんに活用していくとか、そのときのツールとしてICTみたいなものなんかもまさにへき地の学校の強力な武器とかになっていくので、そんなプラットホームなんかもつくりながらやっていくのも一つかなと思います。

最後、本質的にはこういった問題って、僕ら自身が問われていると思っていて、島前で生徒と話したときに、何やりたいのか聞いてたら、町のために何かしたいっていうわけですね。地域のために何かしたい。僕からいうと、気持ち悪いことをいうわけですね。おまえ何だよと、おれ、高校時代にそんな町のためなんか思ったこと一度もないんだと。そんなこと言ってるやつって、ほんとに気持ち悪いということを吹っ掛けるわけですよ。おまえ、何でそう思ったんだみたいなことを聞いてくわけですね。いや、でも、なんか明確な理由とかきっかけない。

これ東北とかで聞いていくと、やっぱり震災とか、そういうのが出てくるわけです。あの震災で、自分は絶対にふるさとに帰ってくるんだと、地域を何とかしたいと、出てくるわけですよ。やっぱりそういう衝撃的なエピソードとかインシデントとかあると、そうなるんです。でも、島前で話聞いて、別にそういう東北みたいなエピソードがあるわけじゃない。

でも彼の話聞いて、僕がなるほどなと思ったのは、だんだんそういう思いが積み重なってきたって言うんですよ。今、地域がこれだけ人の数も減っているという状況の中で、町の人たちこんなふうに頑張ってる、大人たちが。自分の親だっってこういう民間というか、一次産業をやって、こういうふうにやってる。ましてや外からこういう人たちがIターンとかで来て、見ず知らずの学校とか、母校でもない学校とか地域のために何かやってる。

そういう大人たちを見ていて、だんだん自分も早く一緒に闘いたいんだと。こうやって地域の人たちが必死で自分たちの町を守るために闘ってる姿見て、自分ももっと早く強くなりたいとか、自分も力をつけて、この人たちと一緒に闘える自分になりた

いんだ。そういう思いがだんだん積み重なってきたというわけですよ。僕はそれ一つ、ものすごい気づきだったんです。何か素敵なすばらしい教育プログラムをやれば、生徒がそんなふう to 育つとか、やっぱりそういうものではなく、そういう部分もあるんですけど、それだけではなくて、本質的にはそこにかかわる大人たちがどれだけ本気で当事者意識持って、その地域の課題が何かを解決していこうとしているのか。

学校の生徒の問題ではなくて、はっきり言って、大人の地域課題解決型学習そのものなわけですね。提言だけつくっても変わらない。自分たちがどうやってほかのステークホルダーを巻き込んで、協働的に解決していこうとするのか。そういうことが問われているわけです。そういう姿勢をやっていくことで、結果的に、生徒たちとか子どもたちにもその背中が伝わっていくみたいなことが起きてるんです。

もう一つだけ、高校とかである協議会とかで保護者さんと話したときに言われたのが、「今こうやって学校を何とかしようとしてやってるけども、正直うまくいかないと思ってます」というわけです。その人は子ども3人がいるという中で、私はうまくいかないと思ってるんだけど、でもやらなきゃいけないと思ってる。

何でっていう話になると、下の子が小学生にいます。自分の子どもが運動会でどうせ自分は勝てないと、足が遅いから勝てないといって力抜いて走ったり、最後全力で走りきらなかったりしたら、私は絶対怒るというわけですよ。負けてもいいから最後まで走り抜きなさいと、私は絶対に自分の子どもに言いたい。そういうためには、自分がここでどうせ無理、どうせ勝てない、だから手抜こうとか、だからやめようというふうにしてやっていたら、私は自分の子どもに、最後まで負けてもいいから全力で走りなさいと言えなくなる。言えない。だから、これ無理だと思ってもやる、やらなきゃいけないと思っ、これにかかわってますということをお母さんは言っていて、僕はこういう大人の姿勢がやっぱり子どもたちに伝わっていくということが、本質的なことではないのかなと思ってるということ

ころです。以上です。

(畦地)

ありがとうございました。では、高石さん。

(高石)

今、瀬戸さんが学校とか中学校にまだちょっと障がいがあるということで、今、岩本さんのほうから信頼関係だという話もありましたが、そういうことで嶺北高校教育魅力化特命官という名前を、本来は地域おこし協力隊なんですけど、それではいろいろ取り組みにくいということで、校長先生にお願いして、県教育委員会の了解を得て、今回嶺北高校の校長の任命を受けて、その名前を任命しています。多分徐々に動きやすくなっていくんだと思います。私も、小・中・高を通じて全部同じように行き来しています。これはもう長年行ってるので、「ああ、あいつか」ということで信頼関係の中のことなんですけど、多分徐々にそういうものは解けていくんだと私も思っています。

それで、今日の「若者の流出を止める教育力」ということで、その地域の教育力っていうのはやっぱり子どもたちに、生徒たちにどれだけ多くの機会を与えてあげられるということじゃないかなと思います。それは部活動であつたりもします。ただ、嶺北高校なんかは生徒数が少なくなって、部活動も足らなくなった。じゃあ1での世界が足りないんだつたら、0.5でいいんじゃないかと。第1部活、第2部活でもいいんじゃないですか。それをやるんじゃないか、第1部活、第2部活、第3部活で三つの部活に所属しておれば成り立つんじゃないかとか、0.5と0.3と0.2でもいいんじゃないかというようなことも考えてます。

少ないなりにやっていくことも大事だし、じゃあそうなると、地域の指導者というの也要るようになってくる。地域から学校に入って、部活動の面倒を見るとか、駅伝を走りたいやつは駅伝もみてやると、いろんなことが分科会も含めて、地域もできることがあるんじゃないかと思います。そういう機会をどんどん与えていって、また、瀬戸さんみたいな人に教育のありようとか、そういったことの高い分

野で機会を与えていってあげたいなと、そんなふうに思います。

もう一つ、流出ということに関すると、いる間に魅力を感じてもらいたいと思います。敷地さんのように、いる間に魅力をすべて分かっているみたいな感じの生徒はなかなか少なくて、出て初めて分かったという生徒もいます。でも、じゃあ帰ろうかということにもならないと思う。やっぱりいる間に嶺北高校の魅力、地域の魅力、中学・小学生にもいる間に分かってもらいたい。特に高校生に分かてもらいたいので、岡村君のように外から来た人には分かるかもしれません、古川さん。でも、地元におる人は外から見たことがないので、いる間に外から見れるチャンスというのも、それも機会なので与えたい。島前高校のような留学制度、東京からいろいろ国内留学とか、そういったこともいる間に、外からわが高校、わが地域を見るチャンスを与えることも大事じゃないかなと、そういうことも含めて、地域でできることはやっていきたいと考えています。

(畦地)

ありがとうございました。それでは最後、高校生の二人には、将来に向けて誓いの言葉を述べていただきますしょう。

(岡村)

すごく重要な役割をいただいたような気がします。高校3年間を振り返ったんですが、今日の議題の題名にもあるように、本当の教育を高校3年間でもらったと思います。学校の先生から、地域の方から、保護者の方から、いろんな方から教育、本当の教育というものを受けさせていただきました。これから僕は高知工科大学に進学して、音のことに研究を進めようと思ってるんですけども、音のことに、嶺北地域では戦闘機とかものすごく飛んで、騒音の被害とかも結構出ているということを知りました。なので、将来はそういった関連で何か貢献できるようなことがあったらいいなという、まだ漠然とした考えなんですけれども、そういうことを思っています。

地域に帰りたいかと聞かれれば、100%帰りたい

というのは今時点では思っていない、どちらかというと、海外に出たいという思いのほうが近いです。1回日本の外に出て、まず日本がどういう状況なのかというのを客観的に見てみたいから。それから、その日本の中でもこの中山間地域というのは、一体どのような役割をしているのかというのを一旦外から見たいなと考えています。必ずしも地域に帰らなくてもできることがあるだろうと。岩本さんのプレゼンにもグローバルという言葉が出てきましたけれども、グローバルでありながらローカルにかかわるというようなことが、これからICTなんかでもできるんじゃないかと思っていますので、これからは外に行って地域を伝える、そういったような人材になりたいと考えています。

まだダイヤモンドの原石はいっぱいあるんですけど、それがまだ土の中に埋まってて全く見えないわけであり、何を磨いてるのかさっぱり分からないと、それじゃあ意味がありませんので、ぜひ海外に行ってその土の中からダイヤモンドを掘り起こして、こういうところなんだというのをアピールできるような人間になりたいと考えています。以上です。

(畦地)

それでは、敷地さん、お願いします。

(敷地)

私は、さっきも言ったように、窪川で保育士をしたいと思っています。まだ高校生活が2年間残っているのは大きいと思うので、この1年間で学んだことを活かして、まだこの1年間やってきたことを続けることも大事やし、新しく何かを始めて何かを吸収したいと思っています。それで、保育士の資格を取るためには、どうしても町外へ1回出ないといけないので、市内で資格を取るか、また県外まで出て資格を取るかはまだ明確じゃないですけど、その行った場所でも窪川のいいところ、高知県がいいんだよというのを伝えられるような高校生活を送りたいと思います。

将来はほんとに窪川に帰ってきて保育士ができるなら、自分が経験してきた楽しいことをちゃんと子

どもに伝えて、その子たちにも窪川が好きとか、将来戻りたいと思ってくれるようななかかわりができたらいいなと思います。

(畦地)

ありがとうございました。最後に、なんか私がおもひ締めする必要もないかもしれませんが、少しまとめというような形でしたいと思いますけども、岩本さんの途中のお話の中に、唱歌の「ふるさと」のお話がありました。「ふるさと」の3番「志を果たして いつの日か帰らん」、つまり私たちはこの100年かけて、中央のために貢献する人材を地方は出せという教育をずっと受けてきたということなんです。その結果がこういう状態を招いてきた。そうではなくて、志を果たしにふるさとに帰ってこい、こういう教育を我々はこれからまた100年やることによって、地域に人を取り戻すことができるのではないかと思います。

先ほど岡村君が海外に出たい、けれどもふるさとに貢献したいという気持ちを切々と語っていただきました。僕は必ずしもみんなが帰ってきて、ふるさとに貢献しろとは言いません。どこに行ってもいいけれども、やはりふるさとを忘れず、ふるさとのために貢献をしたいという気持ちを持って生きていくこと、それがすごく大事。敷地さんのように、窪川に帰って、私は保育士となって、次の子どもたちにふるさとの魅力を伝えたいんだというやり方もありますし、よそに行ってもふるさとを思い、ふるさとに貢献する気持ちを持って、いずれは多分帰ってきて起業もしてくれるはずなんです。なので、そういう気持ちを持ってふるさとを後にする人材を育てることが我々の使命でありますし、むしろ高知がこれから目指さなければならない教育の姿ではなかろうかと思っています。

島根も高知も国の指標ではゲビ争いをしているということになりますけれども、そういう意味では、課題の先進県で課題解決に向けてのまた取り組みの先進県でもあるということが、日本全国、高知やあるいは島根に学ぶべき点がたくさんあるかと思っていますので、ぜひ我々もそういうところに向けて情報発信もしていきたいと思っていますし、高知県の教育委

員会にも、ただ単に数字で学校を再編するのではなくて、必ずしも数が少ないから駄目だという話では今日ではなかったと思うですよ。小さいなら小さいなりのすごく魅力があるということをやっぱり分かっていたら、ほんとに数の論理で学校を再編するのではなくて、ほんとに高校の魅力、それをどうやって高めるかということによって、高校というものを地域の、地域づくりの核にしていく。これが我々今から必要なのではないかというふうに思いました。

ちょうど時間になりましたので、これで私の進行は終わります、あとは事務局にお返しをいたします。

(司会)

ちょうど時間ぴったり、しかもきれいに最後までまとめていただきまして、畦地さんありがとうございました。十分な事前の打ち合わせもできないわけですが、ほんとにきれいにコーディネートしていただきまして感謝申し上げます。

ということで、もう私のほうから、あえてもう最後までめのようなことは申し上げませんが、ステージの皆さん、そしてフロアの皆さん、ほんとに何か一体となった、大変中身の濃い、温かい雰囲気のパネルディスカッションにすることができたと思います。皆さんに感謝申し上げます。

最後に、パネラーとしてご登壇していただいた4人の皆さん、そしてコーディネーターの畦地さん、5人の皆さんに盛大な拍手を送りたいと思います。よろしく申し上げます。

それでは以上をもちまして本日のシンポジウムを終わりたいと思います。ありがとうございました。